

〔同声会第十三回総集会における挨拶〕

〔前略〕次に村上會長は起つて、次の要旨の挨拶を述べられた。

〔文責は全く編輯子にあるのでございます〕

本日この席で多數の諸君にお目にかゝることは私の最も愉快とする所であります。然るにいつもこの會に出席され、いつも本會のためには仕事をされた小山君が突然亡くなられて、こゝに其の姿を見ることの出来ないのは、諸君と共に深く哀むのであります。同君が多年終始一貫して我が樂界のために盡され、樂界から敬慕されて居られたのに、甚だ突然に死去されたことは、返すくも遺憾なことであります。

毎年この席上で學校の近状をお話することが例になつてゐますが、今年は格別新らしく申上げることはありません。在學研究員であつた船橋榮吉君がこの程歸朝されました。同君は聲樂の外に、ピアノ竝に作曲をも研究されまして、其の方の試験までをも受けて歸られました。船橋君の代りに長坂好子君が研究員として渡歐されたことは、既に諸君の御承知のことでありませう。今回から在外の期限が長くなつて三年といふことになりました。期限の長いといふことも結構ではあるが、一面には年々に研究員を派して其の數を澤山にするといふことも大切なので、それらについては種々考慮してゐる次第であります。

學校の入學志望者は毎年多數であるから、其の中の優良なものを探り、少しでも高い程度の課程を學修させて、良い卒業生を出す様

につとめてゐます。そして乙種師範科は現在では設置の當初と事情を異にする様になつて來たからして、今年は乙種師範科の募集を中止し、甲種師範科へ五六人の數を増しました。斯様にすると三年の後には、甲種師範科に十五六人の増員をする様な結果となります。臨時教員養成所も當分は繼續されるから、兩方で毎年約六十人の卒業生を出すことゝなるから、數年の中には幾分か教員の不足を補充し得ると思はれます。

學校の新築は來年度から始まるが、多分分教場の方がさきになるであらませう。分教場の敷地は既に神田駿河臺の鈴木町に選定されてあります。御存知の通り鈴木町は土地も好く交通の便もあり、今までの場所よりもずっと良くなる譯であります。

次に學校内の施設としては、外人教師の増員を計ることゝか、管絃樂の擴張をすることゝか、いろ／＼澤山にあるのですが、國家の財政の現状では、中々思ふ様にまゐりません。絶えず應急の處理をなし、幾分づゝでも常に改善を加へて、少しでもより良い實績の擧る様につとめてゐる様な次第であります。

〔同聲會會報〕第一二七号 昭和二年八月 三〇四頁

(三) 乗杉嘉壽 (のりすぎ かじゅ)

本籍地 東京府東京市豊島区巢鴨町五ノ一二三〇番地。 族称 平民。

在職期間 昭和三年四月〜二十年十月。

履歷 (要約)

明治十一年 (一八七八) 十一月十九日富山県中砺波郡杉木新町 (現砺波市) 生。



乘杉嘉壽

明治三十七年（一九〇四）七月東京帝国大学文科哲学科卒業、大学院入学
実践哲学専攻。十月十二日任文部属、給五級俸、普通学務局勤務。

明治三十九年（一九〇六）六月物品検閲委員。九月二十八日日本九月廿五
日付願私立東洋大学英语及教育に関する講師応嘱の件許可される。

明治四十年（一九〇七）二月十八日大臣官房文書課兼務。四月廿日東京勸
業博覧会審査を嘱託される。七月廿日清国五等双龍宝星受領及佩用免
許。八月十日文部省普通学務局第二課長。九月廿八日中学校における英
語教授法調査委員補助を命ぜられる。

明治四十一年（一九〇八）二月廿六日第五高等学校教授に任せられ、高等
官七等に叙せられる。三月十二日第五高等学校第一学科主任。四月私立
熊本医学専門学校教授嘱託。五月三十日叙従七位。八月十三日第五高等
学校生徒監に補せられる。同年九月八日第五高等学校生徒課主任。

明治四十三年（一九一〇）一月二十五日陸叙高等官六等。三月三十日叙正
七位。十月十二日関東都督秘書官に任せられる。関東都督総府より赴任
の途次上京を命ぜられる。十一月二十三日関東都督総府より都督官房
文書課長心得を命ぜられる。同月同日都督官房文書課長入澤重麿不在中
代理。

明治四十四年（一九一一）二月九日都督官房秘書課兼務。三月三日上京。
四月十四日官報々告主任、統計主任。六月十九日南滿洲鉄道沿線各地へ

出張。同月二十八日南滿沿線各地へ出張のついでを以て朝鮮およびハルビ
ンへ出張。七月十五日都督官房秘書課長入澤重麿不在中代理。九月三十
日陸叙高等官五等。十二月十一日叙従六位（宮内省）。同月十四日
南滿洲鉄道沿線およびハルビンへ出張。

明治四十五年（一九一二）二月二十六日上京。四月二十八日上京。
大正元年十月十六日関東都督総府の命により南滿洲鉄道沿線各地へ出張
のついでを以てハルビンへ出張。十二月二日上京。同月十四日依願免本
官。

大正二年（一九一三）十二月二十七日文部省督学官に任せられ、高等官六
等に叙せられる。普通学務局勤務。

大正三年一月九日小学校教員功績審査員。四月十五日農商務省より東京大
正博覧会審査官を嘱託される。十一月十日水産学校及商船学校課程調査
委員。十二月二十日小学校教科目に関する取調委員。北海道および鳥
取、島根二県に出張。

大正四年（一九一五）二月九日時局に関する教育資料調査委員。十月二十
五日地方饑饉準備委員。十一月十日大正四年勅令第百五十四号の旨によ
り大札記念章を授与される。沖繩、岩手、佐賀、岡山各県に出張。
大正五年（一九一六）広島、山口、長野、熊本、高知各県に出張。一月八
日陸叙高等官五等。

大正六年（一九一七）三月二十八日文官分限令第十一条第一項第四号によ
り休職を命ぜられる。教育および教授法研究のため満一カ年半間米国お
よび英国へ留学。

大正七年（一九一八）十二月十五日帰朝。
大正八年（一九一九）一月八日文部省図書官兼文部省督学官。叙高等官五
等。普通学務局勤務。四月二十四日文部事務官。四月二十四日叙高等官
五等。普通学務局勤務。同月二十六日第二十八回視学講習会講師。六月
十六日普通学務局第四課長。八月十八日千葉県へ出張。十月二十七日陸
叙高等官四等。第二十九回視学講習会講師。十二月十日叙正六位。同月
二十五日長崎、北海道、新潟、秋田、青森、富山、石川の諸県に出張。

大正九年（一九二〇）一月八日都督官房秘書課兼務。三月三日上京。
四月十四日官報々告主任、統計主任。六月十九日南滿洲鉄道沿線各地へ

大正九年（一九二〇）一月七日東京市青年教育調査委員。三月三日兼任文部督学官。叙高等官四等。同月十五日兼任文部大臣秘書官。叙高等官四等。同月三十一日時局に関する教育資料調査委員嘱託を解かれる。六月三日第二回社会教育講習会講師。十月十八日第三十回視学講習会講師。十一月一日愛知、京都、新潟、埼玉、千葉、三重の各県に出張。

大正十年（一九二一）五月四日第三十一回視学講習会講師。同月二十六日図書館員講習所講師。十一月十一日陸叙高等官三等。十二月六日民力涵養に関する活動写真筋書並標語の審査を嘱託される。同月十日叙従五位。愛知、岡山、兵庫、広島、宮崎、鹿児島、熊本、福岡の諸県に出張。

大正十一年（一九二二）四月十四日平和記念東京博覧会審査官。十一月三日叙勲六等授瑞宝章。高知、静岡、茨城、栃木、福島、山形の諸県および大阪府に出張。

大正十二年（一九二三）九月十日豊田教科書編纂委員。十二月十九日免兼文部大臣秘書官。大阪、徳島、香川、島根、福岡、鹿児島、北海道、岩手、山形の各道府県に出張。

大正十三年（一九二四）二月二十八日台湾に出張。大阪、長崎、福岡、京都、三重の諸県に出張。五月二十二日秋田県に出張。六月十八日任松江高等学校長・叙高等官二等。七月十五日叙正五位。八月二十九日叙勲五等授瑞宝章。九月三日新年、紀元節、天長節、宴会に召される際は甲班とされる。同月二十日第九回山陰体育競技会顧問に推薦される。

大正十四年（一九二五）二月二十三日叙勲四等授瑞宝章。八月帝国在郷軍人会名誉会員賞受領。帝国在郷軍人会松江支部顧問嘱託。帝国在郷軍人会第十師団管連合支部顧問嘱託。同支部名誉会員章受領。同支部名誉会員。十月二十三日勲五等瑞宝章勲記受領（第六十五万四千六百六十八号）。十一月九日勲四等瑞宝章勲記受領（第六十五万九千四十三号）。

大正十五年（一九二六）五月二日石川、青森二県及北海道へ出張。七月二十三日満洲へ出張。十一月二十二日天機奉伺、皇后陛下、摂政官殿下、御機嫌奉伺のため東京市に出張。

昭和元年（一九二六）十二月三十日天機奉伺、並皇后皇太后両陛下の御機嫌奉伺。

昭和二年（一九二七）一月三十日殯宮祇候、御大喪儀参列事務打合のため東京、仙台、京都の三市に出張。二月四日殯宮祇候。同月七日御大喪儀、薄内奉送。七月二十七日文部省主催成人教育委員委嘱。

昭和三年（一九二八）四月二十四日任東京音楽学校校長。叙高等官二等。七月四日大札奉祝唱歌楽譜並明治節唱歌楽譜審査委員を嘱託される。十一月十六日昭和三年勅令第百八十八号の旨により大札記念章を授与される。

昭和四年（一九二九）第四臨時教員養成所管理者となる。二月二十八日叙勲三等授瑞宝章。七月一日神宮奉頌唱歌々詞審査委員。八月一日叙従四位。

昭和六年（一九三一）七月一日陸叙高等官一等。同月二十四日欧米各国へ出張（八月出発十二月帰朝）。

昭和七年（一九三二）三月三十一日第四臨時教員養成所廃止となる。昭和八年（一九三三）二月二十一日社会教員調査委員を嘱託される。昭和九年（一九三四）一月三十一日ドイツ政府より贈与された赤十字第二等名誉章を受領しおよび佩用することを内閣奨励局により免許される。

九月一日叙正四位。十月三日満洲国および中華民国に出張。昭和十年（一九三五）七月十五日著作権審査会委員。昭和十一年（一九三六）二月四日叙勲二等授瑞宝章。

昭和十二年（一九三七）七月十五日著作権審査会委員。昭和十四年（一九三九）六月一日日本諸学振興委員会昭和十四年度芸術学部臨時委員を嘱託される。九月十五日叙従三位。

昭和十五年（一九四〇）四月一日興亞学生勤労報国歌の歌詞審査員を嘱託される。七月宮内省より御紋章入木杯を下賜される。十一月九日紀元二千六百年祝典記念章を授与される。

昭和十六年（一九四一）四月十日日本諸学振興委員会昭和十六年度芸術学部臨時委員を嘱託される。四月二十七日海軍省より海軍軍楽隊東京分遣

隊における教務を嘱託される。

昭和十七年（一九四二）七月二十八日日本諸学振興委員会昭和十七年度芸術学部臨時委員を嘱託される。八月三日満洲国へ出張。同月二十四日大政翼賛会より中央協力会議員を委嘱される。

昭和十八年（一九四三）四月二十八日日本諸学振興委員会昭和十八年度芸術学部臨時委員を嘱託される。

昭和十九年（一九四四）二月二十三日日本諸学振興委員会昭和十八年度芸術学部臨時委員を解かれる。日本諸学振興委員会昭和十八年度並昭和十九年度芸術学部専門委員を嘱託される。四月十一日東京都国民学校教員養成所参与を嘱託される。十二月八日帝国在郷軍人会東京音楽学校分会名誉顧問を嘱託される。

昭和二十年（一九四五）三月二十七日日本諸学振興委員会昭和二十年度芸術学部専門委員。十月十五日依願免本官。同月三十日特旨を以て位一級被進。叙正三位。

昭和二十二年（一九四七）二月一日死去。同月三日自宅本郷区西片町において仏式告別式。

次は昭和二十二年当時の弔辞と関連記事である。

弔 辭

昭和二十二年二月一日前東京音楽學校校長正三位勳二等乘杉嘉壽君薨去ノ報ニ接ス。嗚呼悲シイ哉。

君ハ明治十一年富山縣ニ生ル。年少ニシテ俊敏、明治三十七年東京帝國大學哲學科ヲ卒へ、直ニ職ヲ文部省ニ奉ジ、普通學務局第二課長、第五高等學校教授、關東都督祕書官、文部省督學官、文部大臣祕書官ニ歴任シテ令名アリ、ツイテ松江高等學校校長ニ榮轉ス。

昭和三年四月我東京音楽學校長ニ任ゼラル、ヤ、銳意校務ヲ刷新

シ、邦樂科ヲ新設シ、兒童音樂樂團ヲ創立シ、屢々音樂教科書ヲ編纂シテ大ニ音樂教育ヲ振興ス。

又我同聲會及日本教育音樂協會長トシテ會務ヲ整理シ、年毎ニ講演會ニ、講習會ニ、或ハ音樂教育大會ニ、全國ノ樂徒ヲ指導誘拔スル等我國教育指導ニ盡シタル功績ハ實ニ偉大ニシテ樂界ノ感謝惜クハザル所ナリ。

昭和二十年十月十五日東京音楽學校長ヲ優退シテ病ヲ養ヒ、漸ク快方ニ赴カル、ヲ歡ビタシリニ、今俄カニ病革リテ遂ニ薨ズ。洵ニ哀惜ノ情ヲ禁ズル能ハザルナリ。

茲ニ東京音楽學校職員生徒並ニ同聲會員一同ヲ代表シテ謹ミテ、英魂ヲ弔フ。

昭和二十二年二月三日

東京音楽學校長 小 宮 豐 隆
同 聲 會 長

〔手書き〕〔祝辭弔祭文案〕

前會長の逝去

前會長前東京音楽學校校長正三位勳二等乘杉嘉壽氏は退院後本郷西片町一〇の自邸に靜養中であつたが、昭和廿二年二月一日逝去せられたので取敢へず役員が弔問に參邸二月三日葬儀には生花一對を呈し小宮學校長並に會長の弔辭を靈前に捧げ會員多數が會葬した。

〔同聲會報〕第二六六号 昭和二十三年四月 一一頁

乘杉は明治三十七年十月に文部省入りし普通學務局に勤務、大正十三

年六月に松江高等学校長に任ぜられるまでの約二十年間を文部属として活躍した。大正八年に普通学務局第四課長に任命されるとこれを「社会教育課」と称し、豊富な国内外視察や出張の経験に基づき社会教育に関する理論を展開した。彼の膨大な論文は、自ら発刊・主宰した雑誌『社会と教化』（後に『社会教育』と改題）をはじめ、多くの雑誌などに発表されている。その思想は近年、現代日本の社会教育理論および社会教育行政の原型として教育学や教育史の分野で研究、再評価されている。

大正十二年には、これらの論文の一部収録と書き下ろしを含む大著『社会教育の研究』が同文館より出版された。第一章「社会教育」、第二章「教育改造」、第三章「文科生活と社会教育」、第四章「團體指導」、第五章「歐米教育事情」からなる。彼の社会教育論の一つに「学校の社会化と社会の学校化」という考え方があつた。これは家庭教育と学校教育と社会教育を結ぶ高邁な教育理念かつ国家理念で、同書はじめさまざまな形で繰り返し述べられている。一例を引く。「学校は、限られたる場所として限られたる生徒にのみ使用される許りでなく、学校の有する總ての意義や設備材料が学校の壁を越えて、廣く社会に及ぶことが甚だ必要である。かくして初めて学校は生徒の上に働くのみならず、社会に向て働くのである。他の言葉で以ていへば、学校は社会より離れて存在せず、社会の間に存在すること、なるのである」(前掲書 一三頁)。昭和四年に文部省に正式に社会教育局が置かれたとき、「社会教育」を旗揚げした当人はすでに文部省を去り東京音楽学校長の任にあつた。しかし彼の社会教育論はそこで終止したわけではなく、舞台を東京音楽学校に移して実践されていくことになる。

東京音楽学校における乗杉校長の足跡はそのまま同校の十七年間に反映されているので、本巻と『演奏会篇第二卷』の該当項目を併せて参照されたい。国内唯一の小規模な官立音楽学校は、その特殊な専門性と有用性を社会に最大限に示すことにより、また作詞作曲から演奏にいたるまで時代の趨勢や国家政策に貢献することによって、ようやく存続と発展を望み得るといふ側面があつた。

御大礼奉祝、満州国建国、ヒットラーユーゲント歓迎、紀元二千六百年、満州建国十周年奉祝、戦時下の音楽報、学徒動員、敗戦——のうち東京音楽学校が無関係であつたものは一つもなく、校長の采配が振るわれなかつた事柄もない。

また在任中に行われたさまざまな学校の拡充や刷新——御前演奏、作曲科の新設、上野児童音楽学園開設、邦楽科設置、外国人教師の増員等々——のすべてに、一貫して校長の社会教育の理念と教育行政の手腕が跡づけられている。

校長は演奏旅行や教練の野外演習、その他の学校行事には必ずのように同行し生徒の輪に加わつた。生徒指導にとりわけ熱心で思想問題に嚴重に対処した彼は、生徒の顔と名前を正確に記憶する術にも長け、廊下で突然校長から名前を呼ばれて驚いたという話も卒業生からたびたび語られる。生徒一人一人に深く印象づけられる校長であつた。在任中の訓示・式辞の多くは当時の『同聲會報』に掲載されている。十七年間の話は型どおりの繰り返しではなくその時々校長の方針や信念が生徒に語りかけられている。

「不幸にして——余は敢て云ふ——それは魂の抜けたルインの様な感があつたのである」とは彼が東京音楽学校に赴任した当時の第一印象を語つた言葉である(『同聲會報』第一六五号 昭和五年十月 二頁)。乗杉校長時代に皇族の臨席を仰いで演奏会が数多く実現したことは、東京音楽学校の存在を社会にアピールし学校の整備や地位向上に貢献したが、それ以上に音楽学校生徒に対して自覚を促し誇りを育てるという教育的な実践でもあつた。校長就任以後も彼の健筆が衰えることはなく、『同聲會報』(当初は『同聲會報』)に、学校教育に対する考え方や東京音楽学校に託す希望などを次々に寄稿している。出張や外遊先から寄せられた紀行文もおびただしい量にのぼる。その文章は乗杉恂編著になる『外遊ところどころ』(平成五年)、乗杉嘉壽遺文集(平成七年)、乗杉嘉壽遺文集 補遺(平成七年)。いずれも私家版)にまとめられている。また東京音楽学校卒業生の思い出を綴つた『東京音楽学校の思い

出』(平成十年。同じく乗杉恂編による私家版)にも乗杉校長について多く語られている。

乗杉の同声会長就任以後、会報は毎号のように校長の訓示や紀行文を掲載し、格段に充実する。会報を手にする卒業生には母校の現状と校長の方針や動静が伝わり、卒業生と母校との一体感が強まった。彼が文部省時代に開陳した社会教育論は音楽学校長在任中もさまざまな講演や文章により展開されていく(戦時下と敗戦直後の卒業式の訓示を含め、訓示・式辞は本巻第二節に掲載している)。

昭和八年には同声会主催により本校内に上野児童音楽学園が開園、音楽の早期教育の必要を認める校長兼同声会長は園長としてこの事業を陣頭指揮する。官立学校の施設を通年で解放し、教官や卒業生が児童生徒に実技レッスンやソルフェージュの授業を行うことは、校長の敏腕はもとより「社会教育」の理想に貫かれてはじめて実現したものと考えられる。

学校外の音楽関連事業や関連団体における活躍も枚挙に暇がない。昭和七年「ラヂオによる児童唱歌コンクール」(現在の全国学校音楽コンクールに継承される)を開始し、「音楽週間」などの企画に参加し、日本教育音楽協会長として楽譜や書籍の出版その他の教育事業に積極的に関わり、進取の気象を発揮した。

乗杉校長時代後半の本校は、軍部がしだいに勢力を増す国家体制に否応なしに巻き込まれていく。社会の需要に応じて慰問や義捐のために行われる演奏会も増えていったが、その一方で音楽報国という戦局協力の形で演奏活動を可能なかぎり継続した。校長の高い教育理念と指導力により、東京音楽学校は戦時下にあつても存亡の危機を免れ、規模・内容ともに引き上げられていった。校長自ら行った作詞には《日本青年の歌》《響れの若櫻》《長唄皇軍必勝》などがある。

昭和六年八月から十二月まで欧米各国の視察を命じられた校長は、外遊先の各地における紀行や所感を「外遊ところどころ」というタイトルで同声会報に十九回にわたって連載した。これは詳細な報告という一面

もあり、貴重な記録を含んでいる。

この連載に先立ち、同声会報は四回にわたり、六年十二月に講堂で行われた校長の帰朝訓示を掲載しているのでこちらを紹介しておく。

乗杉校長帰朝訓示 昭和六年十二月十二日於講堂

その一

幸に恙なく歸朝して茲に同僚竝に生徒諸子にお目にかゝり得た事は誠に本懐の至である。不取敢御挨拶旁々此度の旅行中の出来事や所感の一端をお話し度いと思ふが、何分旅装を解くか解かない今日、勿論組織立つて申上げる事は不可能かと思はれる。

この譯は、歐洲より米國に渡る船の中でも、又米國から日本に歸る船中に於ても、色々の材料を整理し所感等をもまとめて置き度いと思つたが、とかく航海中は誰でも經驗する事であるが頭が散慢で統一しにくひものである。處が此度は大西洋上六日の航海に四日間、太平洋上では二週間の航海中數日間の大暴風雨に遭遇して豫定してゐた事がすつかりア、テ、がはづれて了つたといふ譯で余としても誠に残念であるが、半ば不可抗のことで詮なき事である。斯んな譯であるから、歸朝早々に諸君へ御挨拶としてたゞ思ひ出づるがまゝに、漫然とお話して見る事にする。

余は今回の旅行で、大西洋を渡ること都合三度に及んでゐるが、今度の大暴風雨は船員の話によると何十年にも無いひどい荒れ様で、彼の世界屈指の巨船、四萬八千噸の流石のアクキタニア號即ち紐育の街のブロックを幾つも合せた程な大きな圖體の船も、木端微塵とへし折られて了ふかと思はれる様なストームが四日も續いたの

で、航海豫定數六日に對して、完全に一日の延着を餘儀なくされた程で、三日目の最もはげしい時など波浪がボートデッキをも超えて來た程であつた。而してこの船が紐育に着いた翌朝の新聞にもこの難航が大きな見出しで掲載されてゐた位で、山なす激浪の恐ろしき光景など一般の活動常設館に掲げられて紐育人の噂の中心となつた位であつた。余などもストームの第一日は朝食には食堂に出る事は全く不可能で晝食の際は食堂には出たものゝスープとパンとを少量攝つたのみ、尤もその日の夕方からは大分余も自信がついては來たが、元來船には強い余が、この位難儀したのだから、一般の人達の困難は想像も及ばない事であつた。

太平洋上でも、數日を距て、四五日も荒れたと思ふが、横濱に着く日も大荒に荒れて豫定が可成り狂つて濱や東京驛頭へ出て下すつた方々に大變御迷惑をおかけした譯で、茲に改めてお詫申上げる様な次第である。

こんな譯で歸途の船の旅が無事平穩どころでなかつたので初めの計畫が完全に齟齬して了つた。尤も冬期には大洋——ことに大西洋の荒れるといふことは普通の事で、これを知り乍ら、計畫を立てた方が少々間違つて居た憾がないでもない。

扱、余は日本を出發した日より折にふれ事にあたりて色々の所感を克明に書き記して置いたものが可成りの分量になつて居る。勿論音樂や教育に關したものの、みではなく、我國民の世界に於ける地位、關係、又は諸外國の活動、植民政策、各國民の特質等に至る迄、余自らが見聞し經驗した事項を詳細に旅の途すがら、書綴つたが、今これ等について一々諸君にお話したら數時間でも盡きない位

であるから、今日は諸君に直接的な事柄に就いてのみお話するに止め度いと思ふ。

まづ最初に申上度い事は、この度の外遊は極めて突然の思ひ付きにも不拘、國家財政の窮乏の折柄、文部當局が非常な好意を寄せられて、之に必要な旅費を捻出して呉れたのみならず、この一學期間を、留守にする事をも許して下すつた事に對しては深き感謝を捧げてゐるのである。之はとりもなほさず余一個人の爲でなく、この音樂學校は勿論、廣く我が國音樂教育の全般に亘つての文部當局の理解と同情との實と思はねばならない事である。

次に此一學期間余が本校を留守にした爲、同僚職員の竝々ならぬ御盡力と御配慮は申すに及ばず、生徒諸子が普段にも増して一層緊張して精勵されたが爲に、萬事滞りなく學事が順調に進捗した事も余の大きな感謝の一つである。何といふても遠く萬里の外に在る身には、本國や自分の學校で何か事あればその心配も亦大きいものであるが、めでたくすらすらと學事が進行した事は何よりも誠に有り難い事であつた。

次に、東京出發より歸着まで、領土内は申すに及ばず世界到る處に卒業生や生徒の父兄、さては何等かの此の學校や余個人に緣故ある方々、或は一般好樂家達が、この東京音樂學校長に對し、厚き聲援と便宜とを與へられ、皆寄つてたかつて余を激勵して下すつた事は決して余一個の光榮ならず、實に本校乃至我樂界に對する熱誠の然らしめたるものとして、余は洵に冥加至極と存じて居る次第である。

尙之に就き感激措く能はざる事は、一昨夜東京驛歸着の際、忝く

も東伏見宮妃殿下におかせられては侍女加地女史をわざわざ夜分にも不拘驛頭までお遣し下された事である。殿下のこの御懇篤なる思召のほどは、只々恐縮の外なく、この光榮は乗杉一個人のものならず、これひとへに音楽御奨励の深き思召より出でられたものと、拜察するが、吾々はこの有難き思召に對し奉り必ずや酬ゆる時がなくてはならぬ。

次に、八月廿六日東京驛出發後、三ノ宮に至る沿道の各停車驛毎に、新舊の卒業生、在校生或はその父兄方が御見送下すつた事は申すに及ばず、神戸に着いてからも、多數の卒業生や在校生達が、余の身边を離れず、何くれとなく厚情を賜つた事は深謝の至りで、殊に翌廿七日出帆の際には地元の京阪神の同聲會員數十名が盛なる祝送の宴を張られた上に更に、遠く山陰、山陽さては北陸地方から遙々と出かけて來られ、百數十の方々が之に加はつて賑々しく御見送り下すつた事は、少しも豫想しなかつた事だけに、驚きと歡びの情に浸つたといふ譯であつた。其際宮崎丸の乗船者は比較的小數であつた爲に、神戸埠頭は余一人の鹿島立と何等變る處なき迄の盛歡で、余としては、他の船客に少々お氣毒な感じがした程であつた。斯くの如く直接間接に余を激勵し聲援し、その行を壯にして下すつた諸君の御懇情は深く永く余の心に刻んで忘れられない處である。實際異境の旅の空に在つてもこの諸君の厚き御後援の聲を余は常に耳に感じ、諸君と共に旅するの思があつたのである。

かく感激裡に船出した余は、其後、上海、香港、シンガポール等
到る處で、何れも親切なる歡迎を受けたが、乗船當時よりこの光景
を目撃してゐた其船客などは「貴下は各上陸地で金のチエンヂの必

要もなく、何處でも手ぶらで上陸し、歸船するに際しては屹度何か
お土産をもつて歸つて來られる……云々」と余が船客の羨望の的になつてゐる事を笑ひ乍ら話された程であつた。併し流石は、ペナン、コロombo、アデン、スエズ等では學校關係の出迎へは無かつたが、愈々伊太利ナポリ港で船と別れる時には、卒業生の田中堯子さんが立派な洋装で御主人や其他の人々と共に華々しく出迎へられたのを見て、同乗の船客達が「またはじまつた。何しろ大したものですなア」と羨ましがつた位である。扱、ナポリでは田中氏夫妻のお世話になり、ローマでは聲樂家の菊地綾子さんなどにもてなされ、其後旅の先々の到る處で澤山の卒業生達の懇ろなるお世話に預り、樂々と旅行し得た事は甚だ幸福の至りで、この御厚志に酬ゆる意味に於て將來益々我音楽教育の爲に粉骨碎身せねばならぬと心に期してゐる。

扱、次に今回の旅行の順序及各地に於ける視察の模様に就きて概略申述べ度いと思ふ。之につき余は音楽行政者としての觀察であつて、音楽技術家の立場からでないといふ事を特に豫めお断りしておく。

十月二日早朝ナポリに上陸、直に田中夫妻の案内に依りて同地のコンサルパトロレアーレといふ國立音樂學校を訪問したが、この學校の創設は可成り古い時代に屬し、伊太利國統一以前よりその地方の王侯の庇護のもとに設立せられたもので所謂南方伊太利派の音樂のメツカともいふべき處で、この濫觴は、教會から出たものらしく、校内に在る最も古い建物がその教會當時のもので、床にある聖母の像や壁畫や彫刻は凡てそれ以前のものゝ様で、永き年月を経過

し、古き歴史を物語るいかにも落付のある奥床しい學校だと思つた。

十月三日は早朝ナポリから電車で二時間四十分を費し羅馬に着いたが、驛には永年羅馬に在住し伊太利の各方面に澤山の知己をもち私設大使の稱ある下位春吉氏が出迎に來て居られたが、ホテルロイヤルに荷物を置いて同氏の案内に依り馬車で以て國立サントチチリア音樂學校の視察に赴いたのである。

一寸此處でエピソードにはなるが、この馬車が又非常に具合のよいもので、今から十五六年前、余がこの羅馬に來た頃には、市の内外の交通は専らこの馬車に依つてゐたもので自動車は未だ一臺も無かつた。併し今日は諸外國の都市並に自動車も随分多く馬車と其の地位を轉倒したる觀があるのは、再遊の余にとつてはこの都市の最も著しい變化であつた。ヨーロッパの文化史は希臘・羅馬から始まると言はれる處の古都羅馬には、古典的な馬車こそふさはしけれ、又昔の思出多き馬車が、余の氣に入つたので特にこれを選んだのであるが、同乗の下位氏は、市内の交通機關としては經濟上にも體裁上にも馬車に如くはなし、これを選択した事は、立派な羅馬通であるという賞讃と證言とを余に與へて呉れた。馬車と言へば序であるから、話して置くが、そのうち、オーストリアのウキンに行つた時、卒業生で作曲の勉強の爲在外研究員となつてゐる細川君に驛に出迎へられ、まづ同地の日本公使館に挨拶の爲赴いた折、余の宿所グラランド・ホテルの玄関前に立派な白の二頭立の堂々たる馬車があつた。余は早速伊太利式にタキシイをよして、この馬車を用ひたいと申出たら、細川君も之は結構な思ひ付です、と相乗りして行つた

處、そのホテルからほんの四五丁しかない公使館迄の賃金が六シリング即邦貨で約三圓とられて了つた。伊太利の馬車の安いのに比して、こゝでは又馬鹿高い。細川君曰く「此國では馬車は贅澤物で、普通タキシイの三倍の賃金です夫故金満家からざれば高位高官でなくては用ひません」所變れば品變るで羅馬とは又格段の差であつた。

扱、話は前に戻つて、羅馬着が午前十時四十分、直ちに下位氏と同道で前記の學校を訪問したが、同校ピアノ教授パシフィコ女史の案内をうけて校内を隈なく視察した。同教授は例の有名なダルモンテ夫人の先生で昨年ダルモンテ來朝の際、伴奏者として一緒に來る事になつて居たが、學校が外國（日本）への旅行を許可しなかつたので、行くことが出来なかつたとそれが非常に残念だつたと余に話された。この學校はナポリのそれに比して更にその規模も大きく、内容も一層充實してゐた様に思はれた。設備其他につきては羨望の至りであるが、就中、附屬圖書館の完備せるは（ナポリも同様であるが）、更に感歎せざるを得なかつた。現在の藏書二十萬冊を超え、このうちムジカ（樂譜）の豊富なこと驚くべき程で、彼のミラノのスカラ座開設以來のオペラ歌詞樂譜全部を所藏して居る、即十六世紀の初より今日に至るものをすつかり揃へてゐるし、又羅馬の輩出せるロシニ其他のオペラ作曲者の名曲とかこの外樂聖の樂譜の原稿等に至る迄その一つ一つが國寶とも言ふべきものを澤山貯藏してゐるに付てはたゞ感歎と羨望あるのみであつた。この頃、即十月の初旬は未だ學期が開始せられないので——伊太利は夏は暑氣ことの外強き爲夏休暇が長期間なのと、一年を二學期に分けて、七月中旬

頃迄が一學期で十月の中頃迄が夏休みである爲に——生徒達の授業の參觀が出来なかつた事は返す返すも遺憾であつた。併し同校の各局部の人達が夫々熱心にこの遠來の客をねぎらつて懇切に案内して呉れた事については、ナポリと同様感謝してゐる次第である。

それから下位、パシフィコ兩氏の案内で同校ピアノ教授伯爵フラスカニ氏の創設に係る二重ピアノの實演を同氏の研究室兼販賣所（販賣店を兼備してゐるものである）に於て見學した事は思ひ設けぬ幸であつた。（寫眞参照）〔写真省略〕

このピアノは普通のピアノに更にその鍵盤の幅をせばめて、（キイの数は同じ）子供或は、日本人の如く手幅のせまく且短いものに適する様に鍵盤を設計したもので、せまい方でも廣い方でも何れをたゞいても音に變りなく、廣い方が不要な場合は之を中に收めておく装置になつて居る。之は幼少よりの教育を必要とするピアノ教授には非常に適切な創見であると思ふ。是非日本にも紹介したいと同氏は語つて居られた。此處では、同氏夫妻並令妹の三人が非常に我々を歡待して呉れたが、恰も羅馬に居た菊地綾子君も余に面會の爲此處に來合せてパシフィコ女史の伴奏で日本物及イタリーの唄を歌つて、時ならぬ演奏會がこの伯爵家に於て催されて、旅する身には、甚だ愉快であつた。これが終つてからこの夜放送をする事になつてゐたサントチリア音楽學校長ムレ氏の歌をパシフィコ女史の伴奏によりて放送前に余に聽いて貰ひ度いといふ事でパシフィコ女史宅で午後六時から試演を聴き、同伴せる菊地君は又も先方の要求に應じ日本物を返禮に歌つて呉れた。こんな譯で、思はぬ處で兩國音樂の交歡に依り日伊親善が行はれたのは愉快であつた。かくした

後夜更けてから、下位、菊地兩氏と食事後余のホテル・ローヤルで、余の携行せる學校のレコードを聽いて三人して故國を偲び夜の更けるも知らなかつた。（續く）

〔同聲會報〕第一八〇号 昭和七年二月 五〜二頁

乗杉校長歸朝訓示

昭和六年十二月十二日於講堂

その二

翌朝は寝る暇もない午前七時三十五分には既にミラノへと羅馬を立つた。ミラノに關しても話し度い事は澤山あるが先を急ぐ爲又の幾會にと割愛して、このミラノには往復二回下車したが、同地よりスピスに至りこの國の各地を駈け廻つて再びミラノを經由して、シエークスピアで名高い水の都ヴェニスに寄つたのである。

扨このヴェニスの音楽學校は市立でナポリ、ミラノ、ローマ等の學校に比しては成程規模は小さいが、併し、建築物の内部の立派な事は流石歌の國伊太利一流の學校たるに恥しくなく、金銀の鉞を天井、壁畫等にまばゆき許りにちりばめてある有様は之が學校かと思はせる位で、五十年來、しかも日本唯一の官立音楽學校と誇る當校が、相不變バラック式の建物で、淋しそうな灰色に半世紀の我音樂の歴史を誇らしげに物語つてゐるのに比し、なんとといふ大きながひであらうと、その時も奇異の感に打たれた次第であつた。何れを見ても斯うした堂々たる建物や設備の完全さを見せつけられるについても是等藝術の學府たる音楽學校たるもの、本校の如くであつてはいけな切に感じた譯である。

この學校の校長は伊太利語しか話せぬので、文字通りの手まね足

眞似で、語り合つたが、よくしたもので、お互に、おぼろげ乍ら相手の意志が判つて、余のアドレス等も彼は書止めて、「如何なる御用事でも御足しするから御遠慮なく仰付けられ度い」と親切に言ふてくれた。余は英文の本校の案内書を渡したが氏は氏のものした伊太利語の論文を余に贈られた。斯くの如くして伊太利、スミスは僅か一週間にして巡廻したが再遊の地なれば、物見遊山は一切抜きにしたので、日數少きに比して、目的遂行は十分で、得る處が多かつた。それから今度は、愈々余の外遊の主目的たるオーストリア及獨逸に向つたのである。即、ヴェニスを午後四時頃出發、翌朝七時半に目指すウキンに着いたのであるが、それについて又ここに一つのエピソードが出来た。ウキンへ向つての車中、病後の爲か瘠せ衰へた一人の老人が乗り合せて居たが、發車後伴の老人は、苦しうな息使ひの中から、余に馴れ／＼しく「貴殿は日本人ならずや」と問ひかけたのである。余が然りと應へると彼は直に自分の名刺を差出した。見ると、ウキン醫科大學名譽教授、ハンス・マイヤーとしてある。彼は日本人と知つて余に斯う言ふのである。「自分は老體で劇しいぜ、息に悩まされてゐるので、この間も、自分の後繼者たるピツク教授夫妻の案内で、希臘のアテネの海岸に轉地療養に行つたのである。併し、何分七十六歳の老齡で、病氣も思はしくないので又ウキンに引返す處である。自分が大學に在職中は、日本の若き學者の多數のお世話をしたが、中でも現在日本の醫學界に於て名聲蹟々たる人を數へても十數人の多數に上つてゐる程である。」とて西、山脇、石坂、石原教授等等、氏は記憶に任せて名を羅列したが、余の記憶に残つてゐるのは十數名中僅かに右の人々のみであ

る。氏は更に續けて言ふ。

「今から三四十年前は日本の醫者もこちらの方に研究に來られる必要があつたが、今日は全くその必要なく、その方面に立派な人達が多數輩出されたので、自分達とてもお世話の仕甲斐があつたと満足してゐる譯である。勿論今日と雖、多數の人達が留學して居られるが、最早その必要はないと自分は思ふ。」

余は老學者から、この言を聞いて、我音樂界に於ても外國の人達から、斯の如く斷然と太鼓判を捺して保證して貰はれるのは、さて何時の事やら、と羨ましくもあり、又心細くも思つた。

このマイヤー教授と余とは同室で然も二人きりで余は下、氏は上の寢臺であつたが、あの瘠せ衰へたい／＼しい姿で上の寢臺に居られるのは見るに堪えられないので、夕方になつてから余は氏に、「自分は健康で獅若くもあるから、下の寢臺と先生のそれとを取り換へませう」と申出た處、氏は非常に感激されて「數十年前から日本の方々と交際してゐるが、相變らざる日本人の親切を、今日再び貴殿に於て發見するを得たのは誠に嬉しい」と大變喜ばれたが、暫くして車掌の取計ひで先生もやがて余とは別の下の寢臺に移るを得てこの問題は自然消滅した譯であつたが、翌朝ウキンに着く約半時間前にお別れの挨拶を氏と交換すると、「誰か出迎ひに來る者ありや」と問はれたので自分の學校からの留學生が出迎る筈になつてゐる旨を答へると、「併し、萬一何かの行違ひで出迎の方と會はれない場合は、ホテルを御存知なくば、手頃の處としてはホテル・レギーナがある。併し室が空いてゐなかつた場合は、ホテル・ハンメルスラントが適當です」とわざ／＼教へて呉れて、尙貴殿ウキン滞在

中に何か御用の出来た場合は、必ず拙宅へ電話して下さいと、いかにも名残り惜しげに余に握手を求めて別れてゆかれた。

扱、驛に着いてみると、先程の氏の言葉が眞實となつて出迎る苦の細川君の姿が見えない。もとよりこの汽車のウキン到着時間は八時であつた。處が時間の變更の爲三十分早く七時半に着いて了つたので、八時迄待てば細川君も屹度やつて来るには違ひない。併しこんな處で半時間も待つのも變だし、来るか否やも不確實なので、約十分許り正面玄關で佇立して待つてゐたが、エ、まゝよと、タキシイを呼んで荷物を積み込み余も車に乗ると、運轉手君が「何處へ？」といふので「ホテル・レギーナ！」と一聲高く叫んで走らした。かくて件のホテルに着くには着いたが老教授の言の如く案の條満員だ。仕方がないから第二候補のホテルへ行こうとすると、番頭が三十分許りお待ち下されば空きますから、といふので然らばと彼等の言に従ひ、荷物を渡して、その中に顔や手を洗はふと導かれるまゝに三階にゆき、そこのあるトイレットに入ると、既に其處に自分の荷物が来てゐる。其處で余は手を洗へると、突然ドアをノックする者があつた。開けると細川君だつた。彼は余の顔を見るや否や挨拶もせず「先生、そんな處で何をしてゐらつしやるんです?!」そこはW・Cではありませんか!」餘りに突然の侵入と詰問とに余もしばし茫然として返事も出来なかつたが、そこはもつて生れた氣質が出て「何もかもあるものか、今用を足して手を洗つてゐる處さ」「では、荷物の置いてあるのはどうした譯です?」と逆襲だ。「それは君が事情を知らぬからだ。あと半時間待てば空室が出来るといふので、その時間を利用して用足しに來た處なのだ。荷物もここにも

ち運んで……」苦しい辯解だ。すると彼「立派な椅子があるのはこれ如何?」詰問は益々急だ。……彼は鋒先を轉じて、「とにかく、先生、日本の音樂學校長たる者がこんなケチ臭いホテルでは國辱です。豫ての御通知により、當市第一のグランドホテルにちやんと室を豫約して置きました。こんな宿は羊の群と輕べつされるヤンキーや田舎者の泊る處で、我大日本帝國の音樂學校長閣下の來る處ではありません」彼は斯う斷然と言ひ切るや否や余の返事も待たで、連れて來たポーターにサツサと余の荷物を持たせ大急ぎで、余をグランドホテルにと案内したのである。

斯くて問題のホテル・レギーナとは幸か不幸か縁が切れたのであつたが、扱今度のホテルは名の示す通り實に宏大なものだ。正に前者とは雲の泥の相違である。このホテルで余の爲に選んであつた室は、三十何室かのうちまづ六室を選び、この中から更に吟味して一つを選んだといふ勿體のついた室であつた。

さて、萬事萬端滞りなく決つてから、如何にして、余がレギーナに行き、そこへ彼が飛込んで來たかの因果關係について、餘り不思議なので尋ねてみると斯うであつた。細川君は予が朝八時着といふので十五分前に驛に駈けたが、汽車は時間變更で七時半に到着してしまつたといふ。これはしまつた!と當惑顔して、丁度其處に居た一人の巡查に日本の紳士が一人下車しなかつたかと尋ねると彼は「下車して暫し玄關の處に佇んで人待ち顔であつたがそのうちに立去られた」といふ。何處へ行つたか勿論知らぬといふ。愈々當惑して、二三歩あゆみ出すと、今度は他の查公が走りよつて「君は日本人を迎ひに來たのだらう。その日本人はホテル・レギーナに行つた」

といふので、胸をホツト撫で下し早速後を追駈けた次第ですと語つた。

第二の巡査が細川君にこの答の出来たのはけだし余が運轉手にホテル・レギーナ！」と聲高に命じたのを聞いてゐたのに違ひない。後日このことを同地の有田公使に話して、オーストリアの巡査も馬鹿にならないと笑つたことである。

斯くして多少の行違ひの中からとにかく、この聴感覺の發達した然も注意深き巡査のおかげで、師弟相會し得て、三年間の久濶を謝した譯であるが、この寸劇たる珍劇はたしかに一つのいゝエピソードではある。

扱、話が十分横道にそれたが、斯くの如きプロセスを経て、オーストリー國ウキンの客となれる余は種々な處を視察したが、此處では他は割愛して細川君の在學中のホツホシユーレについてのみ述べやう。

この學校は Hochschule 即音樂單科大學と Academie 即専門學校との併置校で細川君は試験の上前者の方へ入學を許可された唯一の日本人である。(後者の方には數人の日本人も在學して居るが)。この學校の設備の詳細について、やゝ永い歴史やその間にはぐくまれた有名な音樂家について話は省略するが、校舎は蓋し世界に於ける最も新式のものと言ふべく、オペラを演ずる舞臺裝置や音樂演奏堂の設備等に關しては、柏林の國立音樂學校のそれに或は優るとも決して劣るものでなく、流石は音樂國のホツホシユーレだと(う)なづかれた。ことにこの學校では校長のシュミット博士は世界の音樂者として知られ、その見識といひ手腕といひ、正に當代音樂

教育界の第一人者たるを失はぬ。處がこれほど立派なホツホシユーレの方が奥國々家財政の都合上、本年三月より新入生募集を中止し自然廢校の止むなきに至るのを待つといふ運命に到つた事は惜しみても餘りある事で、それが爲に丁度余が視察の當日、三十人の教授が免官になつたので校内は非常に動搖してゐた。そもくオーストリアは大戦前迄は、人口二千四百萬、國土もオーストリア並ハンガリーを併せて廣大なものであつたが、戰爭の結果ハンガリーの獨立が宣せられ、オーストリアの領内はポーランド並チエックスロヴァキアの獨立國に分割せられ、人口は四分の一の六百萬に劇減せられた様なわけで、しかもこの六百萬人中四百萬はウキンの人口であるから國家經濟の根元たる地方農村の人口は合せて僅か二百萬足らずとなり従つて製産力の減退は自ら國家財政の危幾をはらみ、國民生活の經濟的窮乏は一年と切迫し、爲に政治方面に在りては全然ロシア式に赤化し、極端なる共產主義者達の手に政權が委ねられ、何時如何なる事態が勃發するやもはかり難い状態にひんしてゐる。たゞ現在は、獨逸、佛蘭西、伊太利等の監視の下に僅に事無きを得てゐるが、政治が此状態なれば財政上に於ては完く行詰り、之が延てホツホシユーレの廢校にまで影響した譯である。依て學校では昨年十月の學期始め以前に於て、ホツホシユーレの在學生につき嚴密なる診査を行ひたる結果、將來見込無きと認むる者は全部之を除籍し、残りの極小數の優秀なる者のみは卒業迄は所定の學修をなさしめ、それ等の者の卒業を待つて廢校を行ふといふ、聞くも哀れな運命に置かれてるのである。斯うした混亂動搖の際ではあつたが、併し、余の訪問に對してはシュミット博士外幹部が親切丁寧に余を

案内して呉れたが、來るべき運命を思へば同情の念禁じ難きものがあつた。何といふても國民生活に一番大切な事は、その國家の健在なる事で、如斯國家の基礎が薄弱になれば教育も何もあつたものではない。吾々は不十分乍らも今日一定の方針の下に斯く教育を續けて得てゐる事は何といふても我國家のお蔭と感謝せねばならぬ。扱四日に亘るウキン滞在は、只一人の卒業生細川君と朝ままだきより夜更くる迄方々を廻つて歩いたのであつたがいよいよウキンの町とお別れ、伯林に立つた時、一人残される細川君の姿のいかにも淋しうであつたのは旅先だけにいたく余の心を打つた。余はその時、君の健在を心の中に禱り乍ら彼に見送られてウキンを旅立つたが、余が伯林着後同君よりの便りによると、お別れしてから數日間は何も手につかずたゞぼんやりして了つてしかも物寂しい心で暮しました。恰も懐しい父に別れたとでも言つたらいゝだらうと思はれる想ひをして之を書いてゐます云云の手紙を受つて、余は再び彼の上の思をはせてその健在を禱らざるを得なかつた。

伯林へは十二時間半位を費して午後十時半にシレジア街道の最終驛に到着したのであるが、此處では又大變な歓迎で、驛頭には例のクロイツアー教授、クニーシュテット氏（オペラ樂師）外獨逸人の求職者數名及同聲會員等十數名の出迎を受けて、直ちにホテルエデンに入り、此處で伯林の新聞記者達にステートメントを發表した後、出迎の人々は、ビールを舉げて余の安着を祝つて下さつた。

故國のニュースや旅の事どもにつきて物語りの後寝に就いたのは夜中の二時であつた。翌日は獨逸側及日本側の各官廳、銀行、商店

等關係筋への挨拶廻を一應済し、十四日より三日間、獨逸國立音樂學校の視察にと取りかかつた譯であるが、之に付いては、豫て、同地の佐藤謙三氏より同聲會宛報告所載の一月號を御参照ありたい。

斯くの如く伯林に於ける余のプログラムはその一切を佐藤君が引受け、獨逸外務省並文部省外學校側等と協議の結果、前述の如く秩序整然として寸分の隙なきものが出來上つた譯だが、大體に於て二週間を通じて朝九時から夜更くる迄、食事時間以外は少しの休みなく、大抵夜は旅宿に歸るのが十二時若くは一時頃になつた。余の疲勞は兎も角として、案内役の佐藤君や福井君の疲勞振りには誠に痛ましい位で、お氣毒に思つた。

要するに伯林に於ける同國政府其他學校諸團體等の歡迎ぶりは、實に豫想以上で、日本帝國の音樂使節といった様な意味で、あらゆる尊敬と接待とを受けた事は、余の終生忘るべからざるものである。殊に伯林の各新聞社は勿論全國內の新聞雜誌等にも余の獨逸國訪問が種々な形で報道されてゐたが、日本と異り、獨逸が如何に音樂に對して熱心であるかといふことが之に依つても想像されるであらう。

最初國立音樂學校を訪問した事は既に述べたが、先づ玄關に入ると、帽子や外套の預り所に居た婦人の使用人達が、「本校出身のシヨルツ氏やウエルクマイステル氏は健在なりや？」とか、「よく來て下さつた」など如何にも懐しい氣に親しみをもつて余に話しかけたのは、他所へ來たといふ感じがしなかつた。第一印象が極めてよかつた譯で、之は本校等でも總てお客を親切に取扱ひ、外人の氣付をよくする様に心掛けることは極めて大切なことゝいはねばなら

ぬ。

又其處に迎へ出られた校長シューネマン博士は一名の書記を従へられ、慇懃に余を玄關右脇の學生大ホールに案内した。余は其處で莊重な學生の歡迎吹奏を受けた後、豫定の視察を開始したが、シューネマン校長は三日に亘つて朝九時より夜七時頃まで少しも余の傍を離れず案内せられ、予の質問に關して各部局の教授達の説明を補足し或は生徒の作業等につきても批判を下したり、又は余に代つて生徒に質問を試みるなど、出来るだけ詳細に實際教授の模様を知らしめて下さつた。その周到なる用意、惜しまざる努力等の厚意に對しては感謝せざるを得なかつた。假に、我國の専門學校や大學を視察したとして、校長自らが數日間に亘り終始付添ひ説明に努力するなど、いふ敬意や親切や熱心さなど到底望めない事だと思つた。

このシューネマン博士は傍ら伯林大學の音樂史の講座を擔當せられ、同氏の著書も尠くないが、同氏夫人の話に依ると、今から十數年前即氏が三十七歳の時、此のホツホシューレ（單科大學）の校長に就任したが、その當時、氏の校長就任については可成り異論があり其後と雖、かれこれ口さがさない事を言ふ人もあつたそうであるが、今日では、押しもおされもせぬ大校長である。

氏は獨逸人によく見る批判好きな又研究心の旺盛な人で、各學科の諸方面につき生徒の作業を批判し、ことにオーケストラ等の場合には指揮者の後方から、色々と注意を與へてゐる様は、如何に氏が音樂上に見識と自信とも持つて居られるかを如實に示すもので、上野の學校とは大分違ふわいと心私かに羨望した位で、音樂學校長たるもの須らく斯くあるべし、と思はざるを得なかつた。（つゞく）

〔同聲會報〕第一八一号 昭和七年三月 一（二頁）

乗杉校長歸朝訓示

その三

扱、この學校の各方面に關して視察した事は一に語れば長時間を要し、諸方面に亘るから、之を省略するが、この中特に著しい事に就いて述べやう。

先づ第一に、トーカー音樂に付てゝあるが、之は日本を立つ前に信時教授が獨逸に於けるトーカー音樂の作曲研究方面につきて特に御注意願ひ度いと余は依頼されたが、其時はそれほど大したものとも氣に止めなかつた處、豈はからんやこの研究は實に立派な設備と人物とが、之に關與してゐるのを見て驚いた。即この主任教授は作曲界の新人パウ・ル・ヒンダーミット氏で風采は本校の片山教授に似てゐて、甚だ謙讓な態度の人で、懇切鄭寧に自己の研究に付いて大要を述べ且その機械の運轉、フィルムサイエンスの實際等につきても種々説明してくれた。即動作をフィルムに撮り、そのフィルムにつき作曲を研究すると同時に又作曲から動作の研究をも學んでゆく様になつてゐて、動作のフィルムは十二コマが丁度曲の方の四分の一音符に相當する割合になつてゐると言つてゐた。この研究室には勿論特別の幻燈、活動映寫の設置があるのみならず、映寫されるものはトーカーに關し教授する處の教室を兼ねてゐるのである。

此處の電氣音樂も亦驚嘆に値するもので、主任教授はフォン・トラウトワイン氏で同氏考案に係る電氣音樂器は既に完成の域に達し恰もラヂオのセットの如き函に、或特種な二三のスイッチと調節器

が附てゐてその案配に依りて、演奏者の指のその器に觸れると同時に或はピアノの音となり絃乃至管其他各種の音に變化する様になつてゐる。而して、その各種の音の特色を電流によりて光線に變化して、之を他の室に導き映寫する様になつてゐる。この研究室に働く者は七、八人も居たが、實際驚く可き研究の結果が上つてゐるのを見て流石は獨逸だと思はざるを得なかつた。この外附屬のラヂオ研究所は校内の一部を之に充て、校長自ら之が所長となり各種の研究を行ひ、又之に附屬して音樂のレコーディングを容易ならしめる機械を据え付けてあつたが、余がこの研究室に居る間に特に日本語を以て短いスピーチを別室で放送し、之が終ると同時にレコーディングに依りて余のスピーチをレプロダクトして聽かせて呉れたが、尤も之はこの研究室の一設備に過ぎないで、先づこんな具合でこゝで専ら働く者も數人居た。

要するにこの學校の諸設備と研究の狀況から推して、モダンといふ意味が學校の仕事の上に十分表れてゐるのを見てこの獨逸二國の音樂學校に比し、五十年前の舊體依然としてモダン（良い意味の）な香ひなど毫も無い本校の姿がこの時もまぎくくと頭に浮んだ。

何事についても獨逸人は研究に次ぐに研究を以てし、この研究心の旺盛なる事にはまつたく舌を捲かざるを得ない。三日間に亙つてこのホツホシューレを朝から夜まで視察したが、これで視終つたなど考へることすら出来ないと思つたと言つたら、その内容が如何に豊富であるかゞほゞ想像されやう。

尙此外に彼の有名な伯林のフィルハーモニーで各種の演奏を聽く

こと六回、又或中等學校の學校オペラ又はジング・アカデミーに於けるクリングラー教授の室内樂、有名なドームコーア等の招待を受けて視て來た。日本でかうしたものを經驗した余には、此處へ來ては、まつたく違つた別世界へ來たといふ感が深かつた。

就中獨逸樂界の元老シューマン博士の指揮する合唱で、フィルハーモニーオーケストラの伴奏によるヘンデルのユーダスマツカベウスを聽いた時は、言ひ知れぬ感激に打れた。同氏は六十五六歳で大した老人といふ程ではないが、それでも隨分老い込まれた風に見受けられたが、一度その指揮臺に立つや恰も戰場に於ける勇士の概あり、これが老衰し脚の不自由なる彼氏かと思はれる許りで、同氏は信時教授の先生で作曲家としても知られ、獨逸藝術院の副總裁で元老中の元老で、彼が校長として自ら主宰するジング・アカデミーのコーラス團四百人をして歌はしめた際など、バス及びテノールの實に見事であつた事は、未だに余の耳の底に残つてゐる。人間が斯んな立派な雄大な肉聲をもつてゐるのかと初めて覺へた位だつた。それにしても我國の男聲の貧弱さはなんといふ事だろう。女聲の方は人員二百五六十の中ソリストは別として合唱は大して感心しなかつた。

この際、シューマン博士は、休憩時間に、ステージで余に極めて熱意のこもれる握手をされた時、其周圍に居竝んでゐたアマチュアの歌手達が、この東洋の珍客（？）に拍手を送つたのは、珍景でもあり又意味深長な劇的シーンでもあつたと言つてよからう。

合唱についてはドームコーア即國立教會に附屬せる合唱を招待を受けて聽いたが、ソプラノ及びアルトは九歳から十二歳迄の男兒の

みで、テノール及びバスは伯林市内の學校の音樂教師其他の中年以上の男子のみで、この合唱がピユアで如何にも氣高い感じのした事も忘れ難い事である。此等少年は小學校や中等學校の初年級の生徒でその可憐さと、清澄な聲とは如何に余に深い感動を與へた事である。それにつけても、幼少から斯くの如き訓練を受ける獨逸少年達の幸福はさること乍ら、我國に於ても是非少年達の合唱や一般民衆の合唱をいろ／＼な形に於て組織せねばならぬと其時つく／＼思つた事であつた。

オペラについては、國立、市立の團體から夫々招かれたが、かの有名な薄幸の作曲家ウエーバー氏の最後の曲「オペロン」を觀て、感慨深きものがあつた。氏は百年前の人で倫敦で客死した獨逸の生んだ一人の偉人であるが、痛ましくも病軀を提げて不朽の名作「オペロン」を作りあげたのであるが、祖國に於けるその上演も見ずして此世を去つたのは誠に幸うすきものと言はねばなるまい。獨逸國民の彼への感謝は、遂に國葬の禮をもつてその遺骸を倫敦から故國へ迎へたといふ聞くも涙ぐまじき話があるが、この「オペロン」の上演を彼の故國に於て目のあたり見たといふことは余にとつての感激の一夜であつた。

市立オペラへも招待されて行つたが、この兩方のオペラでは晝間舞臺装置やオペラ全般の行政に關する事までも親しく説明を受けたが、開演中インターヴアルには必ず舞臺裏に迄導かれて、出演のコンダクター、ブルノー、ウァーターを初め主役の人の挨拶を受け余も一々之等の人々に握手を與へて其厚意を謝した等、獨逸に於ては到る處、日東帝國の音樂使節として國賓待遇を受けたといふ歡待振

りであつた。斯様な譯で伯林の二週間は多忙ではあつたが、十二分に視察の目的を達した事は甚だ満足であつた。

此外ベヒシュタインの工場やポツダムフレデリック大王が演奏をされたといふサンスウシイ（無憂莊といふべきか）を見學したり枚舉に違なき程八面六臂の活動をしたが、偶然と言はふか、クリングラア教授のクワルテットに招かれた時、元本校教師クローン氏が相不變の研究心より百數十哩を遠しとせず來聽されてゐたが、氏にとりては忘れられぬ上野の現校長の余の姿を見て、初對面ではあつたが、如何にも懐しいといはん許りに余に挨拶されたが余としても實に思ひがけぬ奇遇に喜んだ次第である。

話は又横道にそれて恐縮だが、前述の如く余が三日間に亙つてホツホシユールを訪問した時、まづ第一に校長室に向くのであるが、その度に常に一分一秒の遅れもなかつた事について、シユーネマン校長、餘程感心したと見え、視察完了の夕會食の席上で、「日本の方は時間が誠に正確である。貴下は朝九時、午後は二時に來校される事になつてゐるが、來着される時刻が一分一秒も早くも遅くもならなかつた。余の室の時計が、その時刻を報ずると同時に、コツ／＼とノツクの音が聞えるといふ具合で、然もその度に何等疲労の影も見えず、莞爾として入つて來られたのには只々敬服の至りである」と話された。すると其席上に在つた佐藤君が「日本人は決して時間的な國民ではない。二時間位遅る事は通常茶飯事である。貴下の今言はれたのは校長時間といふもので、日本時間ではない」と言つて一同朗らかに笑ひ合つた事だが、白状すると、この三日間に余も實際疲れ切つては居た。併し國際的で日本の體面もあるので、獨

逸人に弱身を見せてはならぬといふ負けず嫌ひの氣性（よくいへば）緊張味が余をして、斯くあらしめたので、（シユ―ネマン）氏は三日目には大分弱つてゐた様に見受けられたから恐らく氏の實感が、この話をもち出す原因になつたのであらうと思はれる。若き、日本人たる諸子は一層負けず嫌であれかし之が又我邦の音樂の將來に大なる影響のあることではないか。

獨逸でも佛蘭西でも各種の學校教授の實際を視たが、今その一々を紹介する違はないので割愛するが、このうちピアノ科に就きて一言しておくことは、佛の國立音樂學校では十八歳を過ぎたものはこの科には入學は許されないことになつてゐる。即なるべく指のかたまらぬうちに早く技を仕上げるといふことの爲にこの制限がある様である。即其迄の年齢に於て相當の技術が習得出来なければ、將來大した見込無しと認定されるのである。

扱こゝで生徒が授業を受ける模様はと言ふに、十五六歳位の少女がベートーヴェンのコンツェルトを暗譜で堂々と弾いてゐる有様は誠に驚くべきもので譜を見なければ、一寸先も歩けぬといふのとは大分距離があると思はれる。然も教授連は、實に手厳しく一寸でも間違ふと、生徒をハネ退けて、先生自身が範奏を示しそれでも尙彈きそこなふと先生は今度はピアノの板の上を指でタ、キ、その彈奏法を教ふる等、實に熱心なもので、然もその先生を廻りて同門の子弟は少くとも十五六人のものが己れの順の來るのを待ちつゝ他生徒の授業に傾聴してゐるといふ具合で、時によりては、その彈奏されつゝある曲につき又彈き方について、種々の説明をしたり質問を列席の生徒に發する等子弟間に研究を密接共同に進めてゆく方法をと

つてゐる。

聲樂の場合に於ても右の教授法と同様にして、その日に割當てられない生徒も共に同室してその教材を共に研究させ教授能力を倍加させるといふ風に甚だ能率的な方法を探つてゐる。本校に於てもこの方法は非常に参考になると思ふ。

さて巴里に在りては六日間を費して國立音樂學校の外に私立エコールノルマル・ド・ムジクや有名なグランドオペラやその附屬博物館やルーブルや、民衆娛樂機關たるゴモンパラス、フォールベリジェリイを初めとしルーブルの美術館等も觀たが、それにつけてもこの方面では我國はまだく外國を學ぶ必要が十分あると思つた。

伯林に於ては約十名の同聲會員と數回會食をし又見學も共にしたが佛蘭西に於ても五名の同聲會員が在居して居るが此等の卒業生は何れも、他の日本の留學生に比して、遙かに眞面目な研究をつゞけて居る事は同慶至極である。

〔同聲會報〕第一八二号 昭和七年四月 一一―一七頁

乗杉校長歸朝訓示

その四

それから巴里より英國に渡り倫敦に六日間滞在したが、此處に於ては獨佛ほど音樂について見るべきものは無かつた様に思はれるが、たゞアルバートホール、クインズホールに於ける各種の演奏會——それも演奏者の主なる者は多く獨逸人であつたが——を觀た外、私立ローヤルカレッヂ・オブ・ミュージックをも視察したがその設備規模は佛の國立音樂學校に比して、優つてゐたと思はれる。

就中ウエストミンスター・コーラスを聞いた時は、如何にも英國らしき雰圍氣に浸る事が出来たオペラについては、ウキンでドンジュアン、伯林の國立オペラハウスではウエバーのオペロン、市立劇場ではマクベス、巴里國立オペラではオセロ、紐育ではトスカ、シカゴではリゴレット等を觀たが、何といふてもオペラそのものゝ立派なこと——内容的の充實に於ては伯林の國立オペラに及ぶものがなかつた。が又オペラの普及發達せる點に於ては伊太利が遙かに他國に勝つてゐた様で、建物や見物人の華美なことはやはり何といふても流石は巴里であるが、何れにせよ、伯林などで晝間オペラの説明を聽いて豫備知識を得て、夜間それを觀劇したといふことなどたしかに大なる收穫である。

伯林の國立オペラはリンデン街にあつて設立後百年を経てゐるが他の建築物其他の關係で平面的に擴張する事が出来ないで、やむを得ず立體的に地下三十三尺迄掘り下げてステージはそこからセリ上つてくる様な仕組になつてゐて、この工費のみで二千萬馬克を費してゐる。而して舞臺の照明につきては、極めて緻密な研究の結果、機械裝置によりて自由自在に思ふ様に光線が出る様になつてゐる有様は一寸言葉では説明出来ぬ。しかもその複雑な機械裝置が極少數の技師や監督の人達によつて運轉されて居る、こゝなどにも能率的科學的な獨逸人の頭のよさが覗はれる。

アメリカへゆくと流石はドルの國で、照明等についても、金にあかしてやつてゐるので、結果は獨逸にも劣らぬのを見た。この外余に大きな刺戟を與へたのは各國の音樂學校の附屬圖書館の設備の完備せる事であつた。夫々自國の音樂に關する珍本奇書は悉く網羅さ

れ、自國の輩出した有名な作曲家の樂譜は勿論、他國の樂聖の作曲や原稿等迄も蒐集して、何れも十萬二十萬の藏書があるのを見て祕かに羨望に堪えなかつた。殊に羅馬のサンタチリア校の圖書館に至つては、千六百何十年かのミラノのスカラ座開設以來其處で上演されたオペラのプログラムや歌詞、歌曲を一つ残らず網羅してゐる事など驚き入つた次第で音樂學習に不可缺の圖書樂譜が手元に藏せられ、自國の音樂の沿革が一目瞭然たる設備があるのに比して、本校など誠に裸一貫の學校とも言ふべきであらう。吾々が收得すべき音樂はすべて外國で發達し必要なる圖書はこれ又凡て外國で出版される上に、今日迄其時々の演奏會に必要に迫られて買込まれた樂譜を除くの外これといふ圖書もない事は甚だ心もとない事である。

凡て、音樂學校は、建物と樂器さへあれば足れりといふ或一部の人々の誤れる考は之を矯正せねばならぬ。本校などは樂器といふても、管絃樂に必要なハーブ一つさへもないといふ貧弱此上なさである。處が羅馬でハーブのみの合奏が行はれた時、七十臺も一度に揃へたといふ豪勢振りである。吾々はこの窮狀を忍ぶこと半世紀、之によく堪へて來られた先輩達に深い同情と敬意とを寄せざるを得ない。が余は今後日本に於ける斯くの如き、缺陷をすみやかに補充する様、努力する覺悟である。

管絃樂については、余が何處の學校へ行つても「貴校にはオーケストラありや」「而していくつありや」と問はれるのが常であつた。伯林でも巴里でも倫敦でもこの質問に遭つて少々恐縮したが、先方は四つあるといふのに對し「本校には二つある」とは言つてみたものゝ、そのうちの二つは漸く最近組織された生徒のもので少々心細

い返答であつた。併し、外國のオーケストラは生徒によりて構成されてゐるのが本體で、本校の如く卒業生から出來上つてゐるのは伯林のホツホシユールに在つたもの位で、學校の管絃樂といへば必ず生徒のそれである。今いふた伯林のホツホシユールのは職業團體で、卒業生の活動手段の爲に出來上つてゐるもので従つて學校の授業には直接關係してゐない。この外管絃樂については他日機を見て詳細に申述べたいが、生徒のオーケストラは是非作らねばならぬと余は常識的に考へて、然もこれを實現させたのであつたが、外國のそれに符合してゐた事は偶然とは言へ余の信念が裏書されて愉快である。

扱斯く觀じ來りて茲に諸君に特に考いて置いて頂き度いことは、伊太利や獨逸に於て彼等國民の音樂に付てもつ才能や知識は延いてそれが國利民福の礎石を成すといふことである。音樂の研究に世界を擧げてこれ等の國に集ひ來る研究家は言はずもがな、各國の好樂家の來り集り又、其國の大家達が諸外國への音樂行脚等によつて自國にもたらす収入は經濟上から見て決して少いものではない。佛蘭西が造形藝術たる美術工藝に於て國富を益すと同様、無形藝術たる音樂によりて獨伊が經濟上に獲るものは極めて巨額に上るもので、この意味から藝術至上主義は副産物的にその國に莫大の富を得しむるといふ事が如實に示されてゐる譯である。

また獨逸魂——近い例は、歐洲大戰に於てまぎ／＼と見せつけられたあの驚嘆すべきドイツ魂——の涵養の上に音樂が如何に大きな役割を演じて居るかといふ事も見逃してはならぬ事である。

北方獨逸に於ては氣候、風土等の地理的關係から、造形藝術の恩

恵に浴する事の薄き爲、無形藝術たる音樂の力に依りて、専ら民力の涵養を意圖した事は明かであるが、この國の政治家や教育家達が此考を具體化し、遂に今日見る如き音樂教育の大系を構成するに至つたのである。即ち音樂教育機關としての大學、専門學校、高等師範學校といふが如く、又之直接の監督官廳としては政府には藝術局なるものを設置し數十名の官吏をして専ら之に當らしめる等萬事萬端水も漏さざる用意をもつて、國民一般の教養を高め、實力を養成せんと志してゐるのである。斯くなればこそ、あの測り知れざる底力をもつ國民性が——即獨逸魂が涵養されたのである。實力的にも文化的にも、*Deutschen über alles* と彼等自らの自尊心を誇るここにこそむべなれ。

大戰の結果は不幸にしてあの慘敗を喫し、彼等を窮境のドン底に陥れたが、併しこの中に在りて然も克く彼等を穩忍自重して捲土重來的意氣を以て専ら國力の恢復に孜々と努めしめしものこそ、その國の音樂教育の力でなくて何であらう。しかも當時は、國歩艱難にして、加之四面楚歌の聲喧々轟々たる中に在りて然も尙悠々として彼等の生活をゲニーセンしつゝ自らの力を養ひ得た事の背後に、彼等に祖先傳來の音樂が在つた、といふ事を吾々は決して見逃してはならないのである。

音樂は有閑階級に限られてゐるとか、女子と小人の領分で大丈夫のまきに爲すべき事に非ずなど、嘯いて得々たる識者の、何ぞ我國に多きや。その觀念の何ぞ低級なるや。我國の現状は、彼の獨逸に於て今より百二十餘年前、即一八〇九年のウキルヘルム・フォン・フンボルトが音樂新制度建設に關する宣言書を書いた時代より更に

數十年前の歩みを辿つてゐる状態で「音楽は國民上下の結合體なり」といふが如き、又教化力に對して音楽が如何に効果偉大なるかといふ如きが、我國の識者に普遍的に認識されるのは、何年後のことか、その後初めて日本に於てもかの獨逸の如き音楽的宣言が可能なので、之に思を致す時、音楽に關與するもの、特に音楽教育に關係するもの、努力は竝大抵の事ではない。吾々は十分こゝに覺悟がなくてはならぬ。

次に各國の音楽學校を巡回して、其處の校長が何れも皆其國は勿論、世界的の音楽者であり作曲者である。然も藝術そのものが非常に尊敬される事から、その校長が他の社會の所謂名士と比較して、特に尊敬されてゐるのを見て余はなるほど感心した。然るに相當な地位にあつて常識さへあれば誰にでもつとまるといふ様な日本の音楽學校長の制は是非改良せねばならぬと余はつくづく思つた事である。日本にも世界的の音楽者が輩出して、世界竝の學校長が本校を主宰する時代が早く到來せねばならぬ。余が本校に御縁のある限りは、此等の理想實現の爲に畢生の努力を拂はねばならぬと決心してゐる。即ち余は本校の爲には乃至樂界教育界の爲には粉骨碎身出來得る限りの御奉公をせねばならぬといふ覺悟は、今回の外遊の結果愈々確固たるものになつた。

以上は歐洲に於ける音楽教育の概観であるが、茲でお断りしておき度い事は、今度の視察は、どこまでも一個の教育行政者としてのものであつて、音楽専門家の立場からでないといふ事は知つて居て頂き度い。余は、日本の音楽學校長として必要なだけの視察を——然も短日月間に——して來たのであつて諸君や技術専門家とは自ら

區別していたゞかねばならぬ。

短日月であつたが、今度の外遊は余として得る處極めて多く、百聞は一見に如かずのたとへに洩れず本校の爲に極めて有意義であつたと信ずるものである。而してこの獲て來た處のものはあらゆる力を盡して之を實現し、一日も早く歐洲竝の樂界をこの日本にも實現せねば余の責職は果されたとはいへず、又余の念願も成就されたと申されぬ。

余は如上の覺悟をもつて益々斯界に御奉公致すつもりであるから、同僚竝生徒諸子に於かれてもこの余の微意を諒とせられ、今後は益々余に聲援されん事を茲に切望する次第である。

皆様の御後援のもとに恙なく豫定の視察を了へ、今日茲に相見えの事の出來た事は余の最も欣幸とする處である。茲に改めて、數ヶ月間の余の不在中同僚諸君の格別なる御盡力を謝すと共に、校長不在中なるが故に特に各自注意され、支障なく學業に精勵された生徒諸子に對しては、深き敬愛と感謝の念を捧ぐる次第である。(完結)

〔同聲會報〕第一八三号 昭和七年五月 一―五頁

乗杉校長は昭和十一年十一月十七日から二十八日まで台灣へ音楽教育の視察を行った。当時台灣在住の東京音楽學校卒業生は二十二名。限られた滞在日数の中で島内各地を訪ねた。

余が本校に來てからやがて九年になるが、卒業生約千七百名の中で、昭和四年の創立五十周年祭の時は一舉に七百人の人にお目にかゝる事が出來たが、その後各地に旅行したり卒業生が上京の際來

校して頂き面會する様に努めてゐるので、大部分の方々と面識するを得たが、今同聲會名簿を繰り展げて見ると未見の方は五百名位まで減少されてゐると思ふ。併し残りのこの五百名の方々とも漸次面識を得てその數を零にまでしてゆき度いのが余の念願である。

こうした考をもつて諸所旅行をしてゐる余が遙々臺灣までやつて来て二十二名中二十一名まではお目にかゝれたのは無論大成功と云へるが、併し唯一人の方をミスして了つた事はいかにも心残りであつた。

〔同聲會會報〕第三一三號 昭和十二年二月 一三頁

乗杉は帰朝後「台湾を巡る」というタイトルで同声會報に七回にわたる紀行文を寄せている。ここでは最終回の分を掲載する。

臺灣を巡る

乗杉生

——その七——

十一月二十四日

けふもまた秋空高く風暖かなよき日である。これから日月潭を見物の上、更に臺中迄歩を延す豫定で早朝起床。

嘉義驛には既に津田君が来て待つてゐた。いかにも別れるのが淋しそうである。汽車は七時發であるが、余も又彼を此僻遠の地に一人残してゆくのが氣の毒みたいな氣もちになつた。併し余は聲を勵まして「しつかりやれ」と彼に元氣を付けて別れて来たが、此場合の心理は師と弟子との關係を超えて、自分の子供にでも別れる様な氣持がしてならなかつた。「別れ」といふものは何時何處に限らず

決していふものではないが、まして此様な土地に於ては尙更の事である。

扱余等夫妻を乗せた汽車は臺灣平野の東側を北上して二水驛に着きそこで集々線といふに乗換へた。沿線の集々驛では新高郡視學三浦正義氏に出迎へられ同郡管内の各般の事情就中教育狀況について詳細なる説明を聴取した。

余は東京を發する前から時日が許せば嘉義を訪れた序に阿里山だけへは登り度いと考へてゐたが、此前來た時同様やつぱり駄目になつた。加之鷲巒鼻まで行くのだから更にこれを延長して東海岸を巡り花蓮港をも訪ふてみたいと思つてゐたが日程が許さずこれも不可能になつて了つた。といふのは東京出發が當時の松田文相との特別な要務の爲に三四日間延びたので旅程はそれだけ短縮されて了つたからである。

やがて一時間にして汽車は新高郡の水裡坑驛に着いた。ここは標高三千九百五十米（二三、〇三五尺）の本邦最高の新高山への登山驛であるが登山の時間は無論ないのでこれを看過して余等は驛に出迎へられた臺灣電力會社の林技師長外役員の人々の案内で、同社の自働車で日月潭へ向つた。

林將治氏は四高出身の工學士で年輩から言へば余の後輩といふところであるが臺北で四高出身者の余の歡迎會の席上日月潭の話が出た時、林氏が自ら案内を引受けられたのであつた。お蔭で乗物其他種々の便宜が同氏によつて與へられ、普通の者では思ひも叶はぬ大名旅行が出来た譯で、深く同氏の御配慮を謝する次第である。

目的地の日月潭といふ湖水は七百三十米といふ高地に在る爲に自

働車は屹立した山間のジグザグの道をグン／＼登つてゆく。四圍の眺望は絶佳であるが時々ヒヤリとさせられる様な危険な箇所を通過する。併し道路は素晴らしい。これは電力會社が日月潭の大工事を起す爲に必要な道路なので巨費を投じて造つたので堂々たるドライブロードで、それが蜿蜒とつゞいて居る。これが曾つて蕃人共が横行した所とは思へない位に、機械文明の偉力が遺憾なく發揮されてゐる。

大自然を征服して行く人間の頭腦も大したものだ。かく四方の景色を觀賞し乍らゆくこと約一時間にして目的地に出た。

日月潭

これは臺灣最大の湖水で所謂臺灣八景の一として風光の明媚なることと大規模の水電工事に依つて普く知られてゐる。

この名稱の起因は此湖が一つは日輪の形を成し、他は月弧の形を成してゐるといふので、清領時代光緒三年に丁如霖といふ將軍の命名になるといふ。

そしてこれは又十七世紀初に蘭人の宣教師が世上に紹介したことがあるが、手近の支那や日本人が布教に手をつけないうちに遠い蘭人がこんな山奥に迄——然も恐らく蕃人に布教々々の目的でやつて來たであらう事を考へると、當時から植民政策に積極的に活動をしてゐた和蘭人の努力を窺ふことが出來ると思ふ。

此所の景色は誠に雄大で右方遙かに新高主山を望み七千餘尺の水社、治茆山、一萬餘尺の巒大山の翠巒は黙々たる雄姿を湖齡一萬五千年といふこの湖上に浮べてゐる様は大古の如き靜寂そのもので、自然美の極地と謂ふべきであらう。

この湖の中央には浮島があつて水電會社では小祠を建立して辨財天を祀つてゐる。湖水の元の形は現在のものより餘程小かつたのであるが會社が水電工事の爲湖の一方にダムを設けて漸次湖水を擴大したものである。併し余が行つた時は夏枯れの後を受けて減水してゐたので湖水深く没してゐた昔のまゝの雜木の原始林が湖上に姿を現出してゐるのを見ることが出來却つて興味深い見物をする事が出來た。

水力電氣工事

この日月潭は現在約百七十五萬坪の水面積と約六億六千萬立方尺の貯水量を有し、水電會社では上流五里餘の姊妹ヶ原にて濁水溪の水を堰き止めそれをトンネルで湖水に導き、この外二ヶ所に堰堤を設けて貯水し水量を現在の八、九倍としそれから約一里を距てた地點に導入してここに發電所を設け約千五十七尺の落差を利用して最大十萬キロの大電力を起す計畫で半官半民のこの會社が大正八年に着手してから仕事が大きいだけに幾多進退の岐路に立つたが昭和九年六月ひと先づ竣工した。そしてこれ迄に勞働に従事した延人員は實に二百五十四萬四千人と云はれる。斯んな譯でこの事業は他面に於て臺灣産業の振興と文化の開發とに資する處が大であつた。

化蕃の話——水社

さて湖畔には水門の所に余等の爲にランチが用意してあつてそれによつて對岸の水社化蕃の聚落を訪れた。

蕃人には化蕃又は熟蕃といふて幾分文化に浴し漢民族に同化したものと相不變原始生活をつゞけてゐる生蕃の二種に分れてゐるが、化蕃の六萬人に對し生蕃は十三萬餘も居るといふことである。

生蕃については後に書くがこの水社化蕃といふのは日月潭の湖畔に沿つて茅屋二十七があつて、現在は男七十八、女六十三名を算へ獨木舟で湖上に出て漁をし或は斜地に耕作して生活してゐるのである。知識の程度が幼稚である爲に總督府に於ては、蕃族を教化し智能を啓發し徳性を涵養して文化の光に浴せしめて彼等を善良な日本國民たらしむる事が必要なので蕃童教育や撫育には特に力を注いでゐる。化蕃はこの恩恵に浴してゐるのである。

余等はこの蕃童教育を視察した後、其所で蕃婦達によつて唄はれた杵歌を聞いた。即ち老若十餘人が長短各種の杵で石臼を叩き三、四人は竹筒で地上を叩いて伴奏しこれに和して杵歌を唄ふのであつて、その哀調は太古の如く静まり返つてゐる湖上に流れる。これを聴くものは誰もが原始生活とは斯くの如きものであらうと想像するであらう。化蕃の歌は十餘種しかなく極めて單純なものであるがその中一を選んでお目にかけやう。(凱旋ノ歌)の楽譜省略)

彼等の生活状態は昔は單に狩獵を業とする純然たる原始生活を送つて來たが近來は總督府の撫育や教化によつて漸次本島人の風習に化してゆきつゝある。併し彼等には本來勤勞とか貯蓄といふ觀念が乏しい爲に——これは最も生活状態が低い爲に、殆んど生活費を要しないからであらうが——少し所得があれば男は直ちに酒を飲んで躍り女は杵を叩いて唄ふといつた風であるといふことだ。

生蕃の話

化蕃については大體上述の如くで大分撫育教化されて來たが、首狩りの風習をもつことで有名な生蕃人について次に少し紹介してみたいと思ふ。

生蕃は現在では約十三萬人を數へ全島の高山深谿の間に蟠居し漢民族とも接觸せず文化の世界と全く隔離して原始生活を營んでゐる。人種からいふと馬來系統で容貌や體格からいふと漢民族とは少しの類似點もなく、むしろ我が大和民族に近き點があると言はれてゐるから、少々恐れ入る次第である。種族別から見ると北部、中部及東部の山間に散在するタイヤル族が約三萬二千餘、臺南、臺中、高雄の三州を主として臺東、花蓮港方面に散在するブヌン族の一萬八千餘と花蓮港、臺東廳下のアミ族の四萬六千餘等が一番有勢ですべて七種族、これが七百十餘社に分れ一社は二、三十戸から五、六十戸で各社に頭目があつて統率してゐる。

各種族とも夫々性情風習を異にしてゐるが概して潭悍、犷猛で、山中を奔馳するのはまるで猿の如く、彼等の最も特色とされたのは首狩であるが(前號吳鳳の話参照)現在に於てはこの惡風による被害は殆んど無くなつたといふことでこれは領臺後我が國の理蕃政策の宜しきを得たところといつていゝ。彼等と雖も立派な日本國民の資格があるから蕃童教育には特に力をつくしてゐるが、その教育を受けたものは近來何れも日本服を着て流暢な日本語を話す様になつたといふことである。食物は陸稻、粟、稗を主食とし、鹿、猪、猿等の肉食を好み、酒、煙草は彼等の第一の嗜好品だとの事である。

臺車へ乗る

話のもとへ戻つて、余等はそれから再び舟で湖畔の州經營に係る涵碧樓に案内されそこで晝食の饗應に預つた。館内がなんとなく騒々しく疊替や大掃除をやつてゐる様子なので訊いてみると一兩日中に新總督が來られるといふのであつた。暫らく別室でまつてゐる

とやがて掃除が済んで用意が出来たと迎へに來て案内されたのが今夜小林總督が入るといふ最上等の座敷であつた。

それから今度は埔里社といふところまで自動車で行きそこで臺灣名物の臺車に乗せられた。

埔里社といふは蕃人の騒動で多數の内地人を殺した例の霧社の一部であつて余は案内の人々から當時の模様を詳しく聽くを得た。

この埔里社より先程乗り捨てた鐵道の終點外車埕迄下山する譯であるがこの臺車は御承知の如く臺灣特有の交通機關で甚だ容量よく輕便に出來てゐる。一口にいへば狭い軌道の上を走るトロツコの一種で、普通のトロツコと異なる點は屋根を作り椅子が設けてあることで、健脚の車掌兼運轉手がこれを操縦し、傾斜の劇しきところは可成りスピードが出て恐しい位であるが坂が登りになるとこの車掌君は自ら後押しをして車を走らすことも又トロツコ運轉の場合と同様である。レールは單線なので双方から車が來た場合は身分の上の方が通過する迄他の方は車體を脱して傍で待つて居る習慣になつてゐる。この臺車で余等は無事下山した譯であるが、余等は途中に在つた電力會社の大發電所の幾つかの中の一つに案内され又そこで休息し午後四時やうやく外車埕驛を出發臺中に向つた。

臺中に宿す

午後六時半臺中驛着。ホームでは卒業生や在校生父兄も出迎へられたが、構外へ出ると驛前の暗闇の中に女學校生徒が多數並んでゐた。これはここから約四里半のところにある彰化高等女學校に臺中から汽車で通學する生徒で約百名位が同校教諭の清野君に引率されて出迎へて居たのであつた。

それから、その先に縦に多數の少年團兒童が肅然と整列して余を又杖の禮で迎へてくれた。余に對してこの少年團の指揮者は團の禮を受けられ度しと言ひ更に簡單乍らでよいから是非訓示を與へていただき度いとこの事であつたので余はこの可憐な少年團の勇姿を前に臺中驛前廣場の夕闇の中で一場の訓示を行つた。

臺中の少年團は現在同地の州立圖書館長細野氏が最初、州の招聘に應じ東京の聯合少年團から派遣され、その指導で今日を成したものであるが、臺灣旅行中の然も夜の七時近くに少年團の又杖の禮を受けやうとは豫期せぬ事で嬉しくもあり昔なつかしくもあつた。

歓迎宴

乞はれるまゝに直ちに市内の小根岸といふ上野に甚だ縁の近い名をもつた料亭に入つた。先程出迎への卒業生や父兄方の主催に係るもので、出席の方には卒業生清野、西坂兩君、父兄側は森部、平兩氏、當校の緣故者山崎、磯江氏等で鄭重な宴であつた。

終つて旅館千代乃家に投宿。入浴後就床したのが十二時過であつた。旅行中は朝は早く夜は遅いので相當疲勞したが、臺灣旅行で旅館に寝るのも今夜限りであると思ふと何となく名残り惜しい氣もした。

バナナの話——一貫目金六錢也

話が前後するが今日通つて來たところ——二水驛から應里社に至る山間や丘陵や路傍など、それから臺中へ北上する鐵道沿線などで、よくも斯く迄澤山に植付けられたものだと思はれる程バナナの林が眺められる。

バナナは臺灣ならばどこでも土地の適否に條件はないさうで植え

て置けば獨りてに實を結ぶといふ誠に世話のかからぬ代物で耕地に植える迄もなく道路でも家屋敷内でも野でも山でも植えておけばいゝといふので終ひには、掠奪栽培が行はれて當局でもその整理監督に困つたといふ話である。收穫高の一番多いのは臺東で全島生産額の約半分を占め次が高雄州第三が臺南州といふ順であるが昭和九年調によると輸出、移出額が一ヶ年一十萬圓に上り、この中で我が東京市民諸君が臺灣バナナを消費する年額は二百十萬五千餘圓也と臺灣のお帳面に書き込んであるといふから大したものである。こんな譯でバナナは臺灣では米、砂糖に次ぐ重要産物である。面白いことにはバナナを積込んで内地に向ふ船の出帆時間が時々變更されることがある。それはバナナはすぐ腐敗するので出盛期になるとそれを考慮して基隆港を出帆する時間が變更されるといふので、船會社でも運賃總収入の六割がバナナの運搬料から得られるといふのだから、無理もない話である。

今日も臺中へ來る迄に見聞した話であるが、今年もバナナの當り年で一貫目六錢から八錢といふ相場で、この値では運賃の方が高くなつて却つて捨てた方が經濟的だといふ話を聞いた。いかにも臺灣らしい。鰯の大漁なら捨てなくとも肥料になるが、バナナではまさか肥料にもなるまい。收穫過多の慘状といふところである。

臺中市見物——十一月二十五日

臺中は字の示すが如く臺北と臺南の中間で中部臺灣第一の都市で、明治三十三年都市計畫を起工、日本内地式都市が建設され従つて今日では全島都市中では最も明朗爽快で人口は約七萬の都會である。

先づ公園の中にある臺中神社に詣でたる後面積二萬五千坪あるといふ公園を觀賞し更にその一隅にある放送局や隣接せる有名な水源地等を視た。

それから市内各中等學校を一巡したが、時間に餘裕のない爲自動車を玄關に着けたまゝでその校長と挨拶を交して次へ廻り又同じ事を繰り返すといふ方法で所謂通り一つべんの挨拶に終らざるを得なかつたのは甚だ相濟まない事であつた。

彰化高女へ

斯様に大急ぎで諸方へ義理を濟したのち昨夕清野君に引率されて出迎へてくれた女學生の通學する彰化女學校へ向つた。四里餘の道を自動車で行つたのであるが、此土地は臺灣としては物資集散の市場として殷賑をきわめ交通も四通八達して人口も頗る増加し既に五萬餘を數へる新興都市として將來をもつたところである。

女學校では切なる希望もあつたので一場の講話を試みた後、校内を一巡した。音樂教室は仲々立派で感心させられた。擔任教員の平素の心掛けが偲ばれて床しく思つた。

余は督學官時代から今日迄全國の學校を何百と視察した永年の經驗から、地方を廻つても、その學校の校門を一步入れば、その學校が大體どんなものであるか、といふことが直觀されるのである。そして大抵の場合この判斷は誤つてゐないつもりであるが、これが音樂教室を見た場合も、その受持教員が教育者として如何なる資格をもつてゐるかよく判り延いてはその校長の音樂の重要性に對する認識の深淺といふことも窺知出来ると思ふ。

我が國の音樂教育も斯うした地方の先生方の熱と努力によつて初

めて、向上され振興されるのであるから、余としては音楽教室の立派なものを見る位たのもしくうれしく思ふことはないのである。

基隆港を出帆——歸途に

彰化高女は約一時間にして名残り惜しくも辭去し、十一時九分發の本線の急行列車に乗り、午後三時半基隆に着いた。途中臺北驛では多數の方々の見送りを忝うしたが、その中の八名の方々は、基隆まで同車して送つて来て下すつた。基隆迄の三十分間は冷しコーヒーで食堂に頑張り歡談して來たが、乗船してから、船客や見送人で埠頭がひどく混雑してゐたので、船の上からお互に顔を見合してゐるだけで言葉も交すことが出来なかつたので、この冷しコーヒーの三十分間は甚だ有意義であつたと思つた事であつた。

扱臺灣ともいよく、お別れである。出帆後は波の荒い東支那海も珍らしく平穩で夜は安眠をとり二十六日は上海沖にあつた颱風の通過した後の影響で雨天とはなつたが併し波は靜かであつた。

ところが二十七日は早朝から大時化に出遭ひ船は木の葉の如く奔弄されるので船内は大混亂に陥つて了つた。船の猛烈な動搖、傾斜の爲器物が棚から落ち、椅子や卓子の仆れる音、硝子の破壊される音の騒音で大騒ぎになつた。そんな譯で食堂や社交室へは誰も出来る者はなかつた。

太平洋も太西洋も或は印度洋も乃至はこの東支那海も何回となく通つた余も、今度といふ今度は完全に參つて了つてベッドにもぐり込んだまゝ朝も晝も食事を攝らず意氣消沈の體であつたのは自分乍ら少々不甲斐ないと思つたが、妻はこの大荒れにもめげず室内に閉ぢこもるのは憂鬱だと言つて社交室に出たり或は食事は朝晝とも船

長と二人で平生の如くに攝つた程でその船の強さには驚かされた。併しこの大荒れも午後四時過船が五島列島の島かげに入つてまともな風波を受けなくなつてからは漸次平靜となり夕方には一同蘇生の思ひをし、明朗色は夕方の社交室や食堂に横溢した。

二十八日は朝七時に門司入港の豫定が一時遅着した。實は二十九日の横須賀高等女學校の演奏會に行かねばならぬのでどうしても九時十五分下關發の急行に乗らねばならぬのでこの遅着で少々心配したが、生徒父兄の日原氏や余の弟で商船會社に勤務してゐるがあるのでその船會社からランチを寄越して特別の便宜を與へられたので、船が錨を下す、檢疫がすむ、直ちに上陸、發車といふ具合で最も短時間に汽船から汽車に移り豫定通り發車し翌朝七時十分東京驛に着く事が出来た。

斯くて短時日ながら臺灣旅行を豫定通り終ることが出来たのはひとへに臺灣總督府を初め各方面の方々の御厚情に依るもので、茲に深く謝意を表する次第である。

一年の後斯うして當時を回想してみると、あの臺灣の旅が恰も繪巻物の如くに目の前に展開され、お世話になつた方々の顔が映畫の大寫の如く一つ々浮んで來たり、會話の斷片フラグメントが記憶に蘇つて來たりして余は言ひ知れぬなつかしさを覺えるのである。旅にあつては人の情といふが、それが今更の如く余にはしみぐと味はれる事である。(完)

東京音楽学校校友会雑誌『音楽』より四篇。《躍進日本》と《東京音楽學校學生歌》の作詞を含む。

卷頭辭

乗杉會長

今過去一ケ年の我等の業績を顧みれば、ひたすらに感激の情に打たれ感謝の念に堪へない。何となれば今此の追憶の間にも我等の眺望たり宿願たる本校の幸多き前途の光が我等の眼前に彷彿として見えるからである。

かの創立五十周年記念式擧行の事だけでも、我等は公明正大な人と人との融合、醇厚眞摯な心と心との合致が如何に力強きかを如實に體驗し得て將に我等の向ふべき途が最も明瞭に指示された。加之に依て正に本校存在の意義を闡明し、本校の傳統的精神を如實に物語り得たと信ずる。

九百餘の現在職員生徒や一千貳百有餘の卒業生はいはずもがな御一方のやんごとなき貴賓に輝いた式場に親しく列つた人達を初め宏くラヂオの放送や新聞雑誌の報道を通して全國民にまでも多大の感動を與へ彼等をして益々本校に對する希望の實現に心から喜び祝ひ更に大きな期待を將來に繋ぐに至らしめた。

更に過去一ケ年間に行ひたる幾多の演奏會は如何。何れも我等の努力の跡を遺憾なく物語り又聊か世の期待に答へ得たことを幸とする、就中京都に於ける御大禮紀念演奏會の意義深き壯圖の如き、又本校最初の試みとして決然立つて街頭に進出せる日本青年館及日比谷公會堂に於ける演奏會の快擧の如き又英皇室特使クロスター公殿下の御前に部下四萬の學生を後に英國々歌を奉唱せるが如き今是等

の一を回顧するだに總身に武者振るひを感じ又感激の情と感謝の念交々到るを覺ゆる。

その他本校の制度や施設に就て或は創始を企て或は改善を加へて専ら將來の躍進を策せるもの一二に止らぬ、是等諸計畫の實現は一面監察官廳たる文部省の厚き同情に由らねばならぬが主として本校關係者たる職員諸君や生徒諸子が一致協力以て益々清新なる氣運を招徠し公明なる校風の宣揚に努めんとする念慮の旺盛なるに由ることを念はねばならぬ。

即一年以前に本誌前號卷頭辭中に於て諸子に期待しておいた事が最堅實に誠に明瞭にその實現を見つゝあることは心より之を喜び且心より之を感謝する。

此の心よりの感激の情と厚き感謝の念は更に來るべき年に於ける我等の信念を深からしめ我等の勇氣を勵まし愈々我等の決心と抱負とをして堅く且高からしむべき原動力となるであらう。即我等は希望に燃え感謝に満ちて一路勇往邁進するのみである。

今の世の人々の嘆きは其の生活に感激乏しく希望少きことである。殊に最高藝術にたづさはる音楽家にして此の感激なく希望なきは世の爲め人の爲め最も悲しむべく嘆くべきことである、何となれば音楽藝術家は是等現代人の尖端に立ちて此の悲しみよりも彼等を救ひその悩みより彼等を助くべき勇ましき義士を以て任ずべき人達であるからである。

諸子はこの高き抱負と堅き決心とを以て將來その重大なる任務に服しその天分を盡すべき素養を今に於て遺憾なく培ふことに努力せられんことを心から禱念し囑望する。

巻頭辭

會長 乘杉嘉壽

We study in these days not to know, but to pass;
so the consequence being that we pass and don't know.

これは一九一六年歐州大戰の眞最中、ロイド・ジョージ大宰相の下に文部大臣として令名全歐に普ねかつたフイツシャー氏の英國民に呼びかけた——否浴せかけた名演說中の一節である。之は時の英國民にとりては最も痛き處を指摘されたもので寸鐵人を指す程の警句である。即ち英國民の從來の攻學的態度は所謂gentlemanlike^ヂ、一種のお化粧に浮身をやつし内容の伴はざるおし、やれに終始して、典型的英國紳士を以て得たり賢しとしてゐたのであつた。

某々學校を卒業したといふ事のみ依りて其母校の金看板を笠に着て、徒に自己陶醉に耽溺して居た状態で、彼等に在りては學問と實力とは何等の交渉も持つて居なかつたのである。斯様にして傳統的形式美に墮した保守的英國民は、無自覺にもその状態で歐州大戰に迄至つたのである。その結果、流石に地球上太陽の沒せざる所なき大英帝國も、學術に、經濟に、軍事に乃至あらゆる方面に衰退の徴候を自らにも認めねばならぬ程になつて來たのである。而してこの現象は實力主義の獨逸を相手とせるあの大戰に於て、まぎ／＼と經驗せられたのであつて、陥りつゝあつた英國民を覺醒さすべき警鐘としてあの名句が全英に鳴り響いたのであつた。即ち、學問はもとより人格の完成を終極の目的とすべきであるが、只單に、上品だとかセントルであるとか、といふ事だけでは、立派な人格は意味

されない。實力といふことが要素となつてこそ初めて人格も完成されるものであつて、從來の英國民は、この點に於て大いなる缺陷をもつてゐたもので、彼の衰運の根本的原因を爲すものこそ英國民のこの缺陷であるといふ事が判然と指摘されて、茲に英國教育の大改革とはなつた譯である。

翻つて我國の教育に就きて見るに、その全般に關しては暫く措き、音楽界に就いて言へば、過去半世紀に亘る洋樂研鑽に於ける學徒としての努力精進に對しては、余は多大の敬意を拂ふのに吝なものではない。併し、音楽そのものゝ本質上よりして、その研究が難中の至難であつて、他の諸々の學問に比して格段の努力を要するといふ事を余は特に諸子に告げて置かねばならぬのである。

我等の樂界に於ける幾多先輩の五十年に餘る獻身的努力、犠牲的精神を以てして、尙現状の如くであるのに、前途は尙遠遠にして、然も幾多の障礙が横はるのみか、洋樂研究の終極目的として、我等の新國樂創成といふ大事業が控えてゐるのである。この大目的の爲には、諸子に於て餘程の覺悟がなければ、我等の翹望するこの大事業の完成は思ひも寄らぬ事になるのである。

余が前に述べた所謂金看板式の學問、實力の伴はぬ攻學的態度即ちかの傳統的形式美に終始せる大戰前の英國民の態度こそ、諸子にとりては他山の石と爲すべく、深く自覺して粉骨碎心以て我等の大理想に向つて勇往邁進せねばならぬ。

三千年來培はれた比類なき我が民族の底力、我民族の眞價を發揮すべきの秋、余は特にフイツシャー氏の警句を諸子に提供して、諸子の一考を煩はさんとするものである。

躍進日本

乗杉嘉壽

皇紀二五九五年はいふまでもなく、世の所謂非常時日本が實際に非常時局に當面せんとする年である。是迄叫ばれた非常時日本は眞實の非常時日本の序曲であり、序幕であつて、實際の體驗はこれからなのである。もとより既にこゝ數年來日本は内政上にも外交上にもはた又經濟上にも非常時局を體驗してゐるのであるが、併し又一面より見れば内政上には種々の憲政上の危機を孕みつゝも未だその破綻を見たわけでもなく寧ろ少しづつでも政黨や國民の覺醒が促進されつゝあるのであり、又外交上では全く孤立無援に陥つたとはいへ、我等の主張を遺憾なく徹底せしめ毅然として正義の大施を世界に掲げ清新の氣魄を人類に投げかけたのである。又經濟的には文字通りの惡戰苦闘ではあるが、我日本の實力は今や世界の市場を席捲し雄飛せんとしてゐるのである。即ち非常時日本の國民の覺悟はよく躍進日本の實を擧げつゝあるとも考へられよう。艱難汝を玉にすとの古語は今や現實に我等の體驗となりつゝあるのである。是あるかな躍進日本の我等は光輝ある皇紀二五九五年を迎へるに當り愈々躍進日本を目指して勇往邁進すべきであり、いかなる艱難も障碍も之を突破し之を克服せむとの覺悟が肝要である。かかる金剛不壞の決心覺悟には吾人は須らく先づ以て次の「躍進日本の歌」を聲高らかに歌ふべきである。何となれば歌ふ事が出来ぬものにはその覺悟は出来ないからである。喝！

躍進日本

一、昭和の御代の輝きは、何にくらべてたたふべき、八重柵雲を開き分けて、豊坂昇る朝日子か

躍進々々あゝ日本。

二、國威と共に國産の、品こそ出づれ外國に、堤は切れて流れ出づる、水の勢さなからに、

躍進々々あゝ日本。

三、高き木にこそ風は吹け、國難いかに來るとも、わが身を捨てゝ國に盡す、我にはやまと心あり

躍進々々あゝ日本。〔案譜省略〕

〔音楽〕第十五号 昭和十年三月 一〇二頁

銃後に於ける我等の覺悟

會長 乗杉嘉壽

懸軍萬里、砲煙彈雨の裡に死を鴻毛の輕きに比して力戰奮闘する我が皇軍將士の忠勇義烈、蠻雨瘴烟の中で衣食は元より睡眠休養など夢想だに出来ぬ困苦缺乏の將兵の陣中生活を思ふ時、我等はたゞ感謝と感激あるのみである。

省みて我等はこれ等將士の勞苦の萬一に値するだけの働きを日常してゐるであらうか。果して我等は銃後に於て國民の分を各自十分竭して居るであらうか。

皇國の爲私を滅して御奉公する將士を思ふ時、銃後の我等は常に反省し、自戒して緊張を失ふことがあつてはならない。

人道無視の暴戾支那の膺懲、共產主義排撃の聖戦は皇軍の絶対勝利に終り首都南京の落城も目睫に迫り蔣政權の支那中央政府としての意義は將に消滅せんとしてゐるが、併し尙且彼等が敢て長期抗戦の擧に出てゐる所以のものは何であるか。言ふまでもなくそれは背後に在る英、露の支援に依るもので、南京政府潰滅後に來るものは、これ等の國をも相手にして戦はねばならぬといふ覺悟を要することである。換言すれば支那に關し、軍事、外交、經濟、思想、文化等の發展に於て我が國と立場を異にする此等諸國が、日本を對象としてスクラムを組んで我等の正眞面に立ちはだかつてゐるのであつて、此度の事變は支那一國でなく數ヶ國を相手にするところの、我が國有史以來の大戦争であるといふことをも諸子は判然と認識してそれに對する國民的覺悟をもたねばならぬ。

即ち今次の戦争は銃前銃後を通じて國民全體が参加し、その全能力を總動員して闘ふべきもので、謂はゞ天與の一大試練である。此の天與の一大試練に打克つて我國の生命が進展して行く相は丁度我が東京音楽學校といふ有機體の生命の發展についても之を見る事が出来る。

本校がその任務とする國樂の創成、我が國の音楽文化の進展に寄與すべき爲には現在の組織機構に於ては無論不十分たるを免れぬ。例へば管樂や作曲専攻生徒の募集も又管絃樂部の制度化も漸く數年前の實現に屬し、その他音楽學校として當然在るべき樂劇科の新設や近代科學の應用其他に依る各科の充實並教授上の改良等内外の整備に於て考慮を拂ふべき餘地多く且その計畫も臧しては居るのであ

るが、之には常にこれを實現すべき國家の豫算が伴はねばならぬ。何といふても數年前迄は創立當時と余り大差ない制度機構でやつて來た過去が過去なので一朝一夕に内容外觀が整備されるといふことは困難である。併し、我等は斯様な困難や不自由を忍んで創立精神を如實に具現することに力めて來たのでとにもかくにも今日の大を成すに至つた譯である。

斯様に本校の擴大強化の爲通つて來た過去十年を顧みると、それは洋々たる春の海に船出した如き和やかな航海許りではなかつた。大小幾多の嵐に遭遇し、それを一つ々々突破して來た處の試練の連續であつたと言へる。

併し、然あるべき本校の生命を伸長してゆく爲には此際我等は左顧右盼するの要はない。一致協力して難關は之を突破し試練は之を克服してゆくまである。我等が本校の創立精神を顯現する爲に自ら省みて正しいと信じた時、この大道をたゞ一路邁進するのみである。本校は今やその前進に當つて重大な時機に際會してゐる。諸子はその爲にはこの不退轉の指導精神に従ひ相共に一途邁進の勇猛心をもつて日夜努力せねばならぬ。

以上の如く余は國家非常時に際し諸子に向つて時局の重大性を説いたが、諸子に於ても余の意のある處をよく諒解し、日常の修學にあつては前線の將士の精神をこころとして各自その本分を忠實に實踐する様に努めて貰ひ度い。これが即ち銃後に於ける諸子の聖なる義務である。(二二、二二、四)

東京音樂學校學生歌〔楽譜は次頁〕

乗杉嘉壽 作詞

一、我が國學の創成に、

我等が擔ふ使命ぞ重き、

つとめはげまんだゆみなく。

内外の樂の研鑽に、

杜の縁をためしにて、

若し我等は、若し我等は。

二、尊き光榮と傳統の、

我等が仰ぐ恵ぞ深き、

つとめはげまんだゆみなく。

育あつき學風に、

花と盛を競ひつゝ、

愉し我等は、愉し我等は。

乗杉校長が社会教育という観点から音楽教育を論じた文章の一例をあげる。

青年學校に於ける音樂科新設と吾等の任務

會長 乗杉嘉壽

今回實業補習學校と青年訓練所とが合併されて、青年學校が新たに設けらるゝに至つたことは、時代の要求と該教育實施の經驗上から寧ろ當然なことゝはいひ乍ら、愈々これが實現を見るに至つたことは、慶賀の至りに堪えない。元來青年訓練所なるものは、余が文部省社會教育課長在職中、軍事教練の實施に伴つて設けらるゝに至つたもので、余一個人の立場からいつても、始めからこの青年學校の案が望ましく、特に青年團の創立に關係し且當初からこの青年學校設立の主張者であつた余としては、この制度の實現が尙十年遅れ

てゐる感がするといへ、今回青年學校が設けられたことに就いての喜びは誠に大なるものがある。加ふるに現職の仕事に關係し、音樂教育に因縁の深い余として、青年學校の教科内容に就いての喜びを感じずには居られぬ一事がある。即ちそれは、青年學校の教科内容に普通学科として特に音樂に關する事項が明記されてゐることであつて、青年子女の音樂に對する教養の必要なることが、當局に於て認められたといふことは正に特筆に値するといはねばならない。元來我國の學校教育に於ては、制度上に於ても又實際教育上に於ても、音樂の重要性が認識されて居なかつたことは明白なる事實であつて、男子は久しい間初等教育以外には、音樂の教養を受くる道が皆無であり、辛じて二三年前に中學校の教科目中に音樂が加へられたとは云へ、而かも僅かに低學年にとゞまり、又女子にあつては中等教育に於て第一學年より第三學年迄は一週二時間、第四學生は一週一時間の授業があるが、音樂に對する教育者並に生徒及父兄の心構へは全く冷淡であつて、教育上の効果といふ點に至つては、誠に心細い有様である。従つて家庭的にも社會的にも音樂的教養を受くる道の皆無である我國の現狀に於ては、音樂の國民教育上に及ぼす重要な意義が一般國民に徹底してゐないことは、寧ろ當然のことであつて、況んや我國の現狀では、音樂それ自體の有する眞生命を充分に發揮するに足るべき人物と材料に乏しき有様であることも又否めない事實である。さればとて、現在學校教育の制度及び内容上に於て音樂が輕視されても致し方なしと諦めることは、教育者として將又爲政治家としても誠に無責任なことであつて、自らその無能力を深く恥ぢねばならないのである。今日程國民精神の涵養、日

東京音楽学校學生歌

行進曲風：〔N.M.♩=120〕

足立龍夫作曲

The musical score is written for voice and piano. It consists of two systems of staves. The first system includes a vocal line with lyrics and a piano accompaniment. The second system continues the vocal line and piano accompaniment. The lyrics are in Japanese and describe the school's history and its commitment to music education. The score includes various musical notations such as clefs, time signatures, dynamics (e.g., *mp*, *dim*), and performance instructions like *Creac.* and *mp*.

Lyrics (top system):
 一ツガトキハタチノチニセイヤノ
 ニタガトキハタチノチニセイヤノ

Lyrics (bottom system):
 一ツガトキハタチノチニセイヤノ
 ニタガトキハタチノチニセイヤノ

〔音楽〕第十八号 昭和十二年十二月 二～七頁

本精神の作興が世に叫ばれることはない。現今は教育の施設や理窟議論の時ではなくして、實踐躬行の時である。國を擧げて一刻も速やかに人間生活の源泉に觸るべき純粹なる情操陶冶に最善を盡すべきの時である。近時我國の家庭及社會に於ける一大缺陷は情操教育の微弱なる點に存する。就中音樂の教養陶冶に至つては我國民は全く無能力者であつて、吾人は須らく家庭、學校及社會を擧げてこの變態現象を是正し、速かに國民精神の確固たる原動力ともなるべき音樂文化を荷ふべき人物と材料とを創り出すことが刻下の急務でなければならぬ。併しその仕事たるや實に難事業であつて、到底短日月を以てしては成就されず、況んや日本精神を指導し涵養するに足るべき新國樂の創成は、十年二十年を以てしても果されるものではないことは獨逸民族のこの方面に於ける努力の跡を見ても尙百年を必要としてゐるのを見て明白である。もとより我國音樂教育に於ける先輩識者の着眼が絶無であつたのではないが、その力たるや誠に微々たるものであつて、不幸にして他の諸文化に於ける驚嘆に値すべき進歩發展に比して、教育の最も精神的なる核心とも相成るべき音樂の教育的なる根本方針は忽緒に附せられたまゝ今日に及んでゐるのである。即ち學校の制度或は教育上の施設に於て音樂の有する教育的効果の重大性が全く認識されて居なかつたことは、誠に千載の遺恨事であつて、吾人はこの誤られ且忘却されたる音樂文化の眞意義の建設の喫緊なることを痛感するものであるが、先に中學校に音樂科が設けられ、今回再び青年學校の普通學科中に音樂科が堂々と肩を並べて明記されたことは正に留飲の下がる思がする。さり乍ら中學校に音樂科が新設され、青年學校に音樂科が課せ

られたとはいへ、それは單に制度の一角に音樂の偉大なる使命の一端が認められたに過ぎないのであつて、實際その効果を擧げる爲めには、漸次制度の整備を計るは勿論可成速にこの音樂を擔當すべき良き教育者の養成や又それに必要な良き教材の續々として出て來る様に努力すべきである。併し兎角今迄制度の上にも認められなかつた音樂文化が、最近數年間に於てとにかく教育上多少でも必要なことの意志表示がされたといふことは、當局に對して深甚の敬意と感謝の意を表してもよいと思つてゐる。こゝに於てか、音樂教育に係してゐる吾人の覺悟は如何。即吾人は不屈不撓の熱と力とを以てこの制度を完備せしむべきであり、吾人の努力の如何によつては、制度そのものゝ必要無き迄に音樂文化の普及進展を促進せしむることが窮極の目標でなくてはならないからして、希くは滿天下の音樂に理解を有し、音樂に關係ある各位におかれては、青年學校に音樂科が課せられたるこの機會に、その責任の愈々重大なることに悟られて、直接或は間接にこの新法令の精神を充分に具體化し實現せらるゝ様盡力されんことを衷心より切望して止まぬ次第である。

〔同聲會報〕第二一九号 昭和十年十一月一（三頁）

昭和十五年の『同聲會報』には本校についての将来構想と所見が述べられてゐる。

教育審議會に提案

我が國に於ける教育制度を審議すべき教育審議會に於ては近く我が音樂學校に關する審議が開かれることになつてゐるので、乗杉校

長は四月十七日文部省内に開催中の右審議會に出席して當の音樂學校案として大體左記要旨の意見を開陳し又説明するところがあつた。即ち、

先づ本校の目的使命につきましては、國樂創成を主目的としてそれに當る人物の養成、右に必要な研究調査を爲すと共にその結果を實際に應用すること。

本校の組織は本科系統と師範科系統とを截然と區別して豫科は従前通りとするも本科を四年に延長研究科を實技専門の部と實技の外一定の學科を併修せしむる部の二部門に分ち、甲種師範科は明年度よりの國民學校や師範學校の昇格等に照應して年限を四年に延長して高等師範科とし師範學校教員たる爲には更に一年の專攻科を履修せしめ別に修業年限一年の普通師範科を併設して國民學校音樂科教員の養成に充つ。又邦樂科も四年に延長して充實を圖ること。

研究系統としては、管絃樂部の整備、國民音樂文化研究所の併設早教育の研究施設、作曲部の充實等、次に學科目及教育方針としては本科は専ら音樂専門家の養成を主眼とし更に研究科に於ては技術學術の完成を期すること。師範科にありては實地指導機關を整へ、修身、教育の中等教員免許狀を併得せしめて音樂學科教員の地位の同上を期し、邦樂科に於ても修身(作法)國語の免許狀を與へることにより中等教育に邦樂を普及せしむること。將來は邦樂洋樂の對立的名稱を撤廢し、聲樂科、ピアノ科、作曲科、能樂科、長唄科、箏曲科の如くすること。

校舎の改築、それが不能なれば増築をすること。特に音樂を終生の天職として日本音樂文化建設の擔當者たる男生徒の心身鍛鍊を期

する爲に、寄宿舎と鍛鍊道場を新設する事を急務とすること。

尙本校に併んで國民音樂文化研究所を新設して、音樂全般に亘る研究調査を行ひ又音樂教員の再訓練を實施して我が國に於ける音樂界の向上、音樂教育の強化を圖ること等及び本校竝に我が國音樂文化の過去及現在と將來に對する抱負等々に就いて所見を述べられた。

〔同聲會報〕第二五四号 昭和十五年三・四月号 三三頁

乗杉校長の著作は膨大であり掲載誌も多方面にわたるため完全に網羅するにはなお調査を要する。ここでは彼が社會教育の振興に力を尽くした約二十年間の文部省時代を含め、おもなものについて一覽表を掲載しておく。(一)は『同聲會報』に掲載されたもの、(二)はそれ以外の雑誌論文などである。各表の項目中「遺文集」「補遺」「社會教育の研究」「講演選集」の欄に*印のあるものは、それぞれの書物に収録されていることを示す。

(一)『乗杉嘉壽 社會教育草創期における論文講演選集』(上巻 大正三年〜十年、下巻 大正十一年〜昭和七年) 乗杉恂編 私家版 平成十一年

この一覽表は、平成十年に乗杉恂氏により作成されたものに基づいていゝる。乗杉氏には資料提供その他さまざまご協力賜ったことに感謝申し上げます。

乗杉嘉壽著作一覽(一)

題名	会報 卷号	年月日	遺文 集	頁	補遺	頁数
九州旅行記	一六〇	昭5・4	*	二五		
昭和五年第一学期始業式訓辭	一六〇	昭5・4	*	二三		

名古屋訪問記	一六一	昭五・五	*	二八	
皇太后陛下の行啓を仰いで	一六三	昭五・七	*	三三	
夏季音楽講習会に於ける挨拶	一六四	昭五・九	*	三八	
母校通信 第二学期始業式訓辞	一六四	昭五・九	*	三八	
第五十一回創立記念式訓辞	一六五	昭五・一〇	*	四二	
教育勅語煥發四十周年記念式訓辞	一六六	昭五・一一	*	四二	
一九三十年を送る	一六七	昭五・一二	*	四二	
昭和五年第二学期終業式訓辞	一六八	昭六・一	*	四六	
鎌倉清遊記	一七一	昭六・四	*	五六	
昭和六年三月常集会における祝辞	一七一	昭六・四	*	五〇	
昭和六年卒業式式辞	一七一	昭六・四	*	五三	
昭和六年第一学期始業式訓辞	一七二	昭六・五	*	六〇	
能楽堂落成式挨拶	一七三	昭六・六	*	六〇	
昭和六年演奏旅行に先立ち訓辞	一七四	昭六・七	*	六六	
中等教員唱歌講習会開会の挨拶	一七五	昭六・九	*	七〇	
第二学期始業式訓示	一七五	昭六・九	*	七〇	
神戸送別会に於ける挨拶	一七六	昭六・一〇	*	七〇	
昭和六年第二学期終業式訓辞	一七九	昭七・一	*	七八	
湯原先生のことども	一七九	昭七・一	*	七三	
乗杉会長 帰朝歓迎会	一七九	昭七・一	*	七三	
昭和七年第三学期始業式訓辞	一八〇	昭七・二	*	八二	
乗杉校長 帰朝 講演	一八〇	昭七・二	*	八二	
昭和七年卒業式式辞	一八二	昭七・四	*	二九	
昭和七年入学式並始業式訓示	一八二	昭七・四	*	二九	
思想問題特別訓辞	一八四	昭七・六	*	六四	
ある会のこと	一八四	昭七・六	*	六四	
昭和七年第一学期終業式並宣誓式訓示	一八五	昭七・七	*	六八	
外遊ところどころ (欧米音楽教育施設視察旅行記)	一八五	昭七・七	*	六八	
昭和七年第二学期始業式訓辞	一八六	昭七・九	*	七四	

第五十三回創立記念式祝辞	一八七	昭七・一〇	*	七七	
勅語奉読式訓示大要	一八八	昭七・一一	*	八二	
昭和七年を顧みて	一八九	昭七・一二	*	八四	
昭和七年第二学期終業式訓辞	一九〇	昭八・一	*	八二	
昭和八年第三学期始業式訓辞	一九一	昭八・二	*	一〇六	
同声会常集会にて新会員歓迎の挨拶	一九三	昭八・四	*	九五	
昭和八年卒業式式辞	一九三	昭八・四	*	九五	
音楽教育に就いて	一九四	昭八・五	*	九八	
上野児童音楽園開園式に於て訓辞	一九五	昭八・六	*	一〇〇	
昭和八年第二学期始業式訓示大要	一九七	昭八・九	*	一一五	
第五十四回創立記念式訓示	一九八	昭八・一〇	*	一一九	
朝香宮妃殿下を偲び奉る	一九九	昭八・一一	*	一二三	
昭和八年勅語奉読式訓示	一九九	昭八・一一	*	一二三	
皇太子殿下御誕生奉祝之辞	二〇〇	昭九・一	*	一二六	
昭和九年卒業式式辞	二〇二	昭九・三	*	一二九	
御前演奏を了えて	二〇三	昭九・四	*	一三一	
第五十五回創立記念日に於て	二〇八	昭九・一〇	*	一三五	
第二回音楽週間に際して	二〇九	昭九・一一	*	一三九	
満支鮮を瞥見する	二二〇	昭一〇・一	*	一七七	
日本民族の文化のために邦楽の重要性を認めよ	二二〇	昭一〇・一	*	一七七	
昭和十年宣誓式訓示	二二六	昭一〇・七	*	一四六	
昭和十年第二学期始業式訓示	二二七	昭一〇・九	*	一四八	
青年学校に於ける音楽科新設と吾等の任務	二二九	昭一〇・一一	*	一五一	
音楽会館に就いて	二二〇	昭一一・一	*	一五五	
第三回音楽週間を省みて	二二〇	昭一一・一	*	一五九	
第四回児童唱歌コンクール講習	二二〇	昭一一・一	*	一六七	
昭和十年第二学期終業式訓辞	二二二	昭一一・二	*	一八四	
本校敷地の復舊	二二三	昭一一・四	*	一八四	

乗杉嘉壽著作一覽(二)

昭和十一年入学式始業式訓示大要	二二三	昭11・4				一九二
ワインガルテン教師招聘に就いて	二二三	昭11・4				一九五
音楽教育の任務	二二四	昭11・5				一九七
邦楽科設置に就いて	二二五	昭11・6	*	二二五		
児童学園創立満三年に当りて	二二五	昭11・6				
第四回音楽週間を省みて	二三〇	昭12・1				二一九
回顧と希望 上野児童音楽園便り	二三一	昭12・2				二一六
台湾を巡る	二三一	昭12・2	*	二四三		
昭和十二年宣誓式、終業式訓示	二三五	昭12・7				二三一
吾等の覚悟(文部時報より転載)	二三六	昭12・9				二三六
第六回児童唱歌コンクール講評	二三八	昭12・12	*	二三一		
昭和十三年第三学期始業式訓示	二二九	昭13・1				二四二
会員各位にお願ひ二三について	二四二	昭13・4	*	一四〇		
本校職員の定員増加に就いて	二四三	昭13・5				二四五
第五十九回創立記念式訓辭(補遺と重複)	二四五	昭13・9	*	一五二		
教科書「音楽」編纂について	二四五	昭13・9	*	一四五		
第五十九回創立記念式訓示(本集と重複)	二四五	昭13・9	*	二四八		
昨年配当の師範科卒業生の成績報告に基き希望を述べ	二四九	昭14・5	*	一五六		
創立六十周年記念式学校長式辭	二五二	昭14・11				二五二
創立六十周年記念行事を了えて	二五三	昭15・1	*			二五四
昭和十五年卒業式校長訓示	二五四	昭15・3				二五七
四年制甲種師範科の創設を喜ぶ	二六二	昭17・5	*	一六〇		
音楽と国民文化運動	二六三	昭17・9	*	一六二		
第百回定期演奏会開催に就いて	二六五	昭18・9	*	一六九		
第五十五回卒業式学校長式辭	二六五	昭18・9	*			二六〇

題名	掲載雑誌名	巻号	刊行年月日 ⁽¹⁾	社会教育の研究	演説文選集
中学校及高等女学校の教授及管理に関する所見	内外教育評論	四	明41・2		
水害後に観たる富山県の教育	帝国教育	三八七号	大3・10		
農村教育の問題	教育実験界	三五―一	大4・1		
時局の与うる教訓	日本之小学校教師	二一四号	大5・8	*	
予が小学校教員観			大5・10		
国民の試練			大5・11	*	
戦時に於ける独逸青年の意気を論じて我国青年に及ぶ	宮城教育	二三五	大6・3		
米国の戦時教育	帝国青年	三一五	大7・5		
英米の戦時教育	教育時論	一一一〇	大7・11		
研究的實際的の米国	帝国青年	三一―二	大7・12		
外遊所感	国語教育	四一、二	大8・1		
戦後教育の改造	富山県教育雑誌	八二	大8		
戦後経営と教育	愛知教育	三七六号	大8		
米国に於ける教育的観覽施設最近の状況	防長教育時報	二四一―号	大8		
我が国教育の将来	教育界	一八一―三	大8・1		
通俗教育の振興の急務	教育時論	一二三五	大8		
教育刷新の第一歩	内外教育評論	一三一―二	大8・2		
教員養成の将来に就いて	小学校	二六一―二	大8・3		
米国の大学	大学及大学生	一七	大8・3		
米英両国教育界の大勢	京都教育	一二号	大8・3		
米国の教育視察談	教育研究	一八〇	大8・4		
米国の世界的飛躍とその教育			大8・4	*	
米国小学校に於ける学科並に時間の配当に就いて	小学校	二七一―一	大8・7		
戦時外遊所感			大8・9	*	
教育改造の意義と体験			大8・9	*	
国民教育改造の根本義	内外教育評論	一三一―二	大8・11	*	

学校教育の実際化	小学校	二八七	大八・一	*	
社会運動と教育者	帝国青年	五一二	大九・二	*	*
腕と力	内外教育評論	二四一八	大九・八	*	*
欧米女教員の社会的活動	幼児教育	二〇一八	大九・八	*	*
民衆の教化運動	小学校	二九一二	大九・九	*	*
我が国の現状と幼児教育問題					
現代人と業務的精神					
社会教育に就いて					
社会教育の目標					
学習と教育					
婦人の権威と自覚	長崎県教育雑誌	三四二号	大九・一	*	*
社会教育の意義並施設	帝国教育	四六一号	大九・一	*	*
教育の普及と独立	教育界	二〇一三	大九・一	*	*
教育会組織の意義に就いて	愛知教育	四〇六号	大九・一	*	*
教育は斯くの如くにして改善されん	社会と教化	一一〇二	大九・二	*	*
民衆娯楽の改良と誘導	社会と教化	一一〇三	大九・三	*	*
生活改善の意義	教育界	二〇一六	大九・三	*	*
回顧廿年	社会と教化	一一〇四	大九・四	*	*
社会教化と圖書館の利用	教育時論	二二九八	大九・五	*	*
教員組合の本義	帝国青年	六一五	大九・五	*	*
勝つために読め	社会と教化	一一〇五	大九・五	*	*
欧米の教育思潮と我が国の現状	社会と教化	一一〇六	大九・六	*	*
教員組合と労働組合	社会と教化	一一〇七	大九・七	*	*
寸分の油断なき緊張した生活	社会と教化	一一〇九	大九・九	*	*
武陵桃源の夢から醒めよ	社会と教化	一一一〇	大九・九	*	*
都市計画と公民教育	社会と教化	一一一一	大九・一〇	*	*
欧米の教育的努力と日本	社会と教化	一一一二	大九・一〇	*	*
社会教化運動と補習教育	社会と教化	一一一三	大九・一〇	*	*
最近に於ける欧米の教育的努力	社会と教化	一一一四	大九・一〇	*	*
学校教育と社会教育との関係	社会と教化	一一一五	大九・一〇	*	*

民衆娯楽としての活動写真	社会と教化	二一〇二	大九・二	*	
社会教育について	教育時論	一三三一	大九・四	*	
島国教育より大陸教育へ	内外教育評論	一六一四	大九・四	*	*
英国皇太子殿下を迎えて	社会と教化	二一〇四	大九・四	*	*
学校教育の過信を難す	社会と教化	二一〇五	大九・四	*	*
産児制限問題について	社会と教化	二一〇六	大九・五	*	*
社会教育上より見たる宗教	社会と教化	二一〇七	大九・五	*	*
児童愛護に就いて	社会と教化	二一〇八	大九・五	*	*
新聞紙と文化	社会と教化	二一〇九	大九・五	*	*
少年団員諸君に告ぐ	社会と教化	二一一〇	大九・五	*	*
学校教育に対する批判としての社会教育	社会と教化	二一一一	大九・五	*	*
社会教育と家庭教育	社会と教化	二一一二	大九・五	*	*
学校教育の社会化	社会と教化	二一一三	大九・五	*	*
社会教育局設置に関する意見	社会と教化	二一一四	大九・五	*	*
文化生活と圖書館	社会と教化	二一一五	大九・五	*	*
文化経験と知恵と教育と、社会教育の必要を論ず	社会と教化	二一一六	大九・五	*	*
五十年の過去と将来「教育の量より質へ」	社会と教化	二一一七	大九・五	*	*
我が国教育の将来（学制頒布五十年に際して）	社会と教化	二一一八	大九・五	*	*
創立三十周年記念講演（三十年に因みて）	社会と教化	二一一九	大九・五	*	*
学制の功勞者ドクトル・モレーの追憶	社会と教化	二一二〇	大九・五	*	*
社会教育の核心	社会と教化	二一二一	大九・五	*	*
到面の教育問題	社会と教化	二一二二	大九・五	*	*
幼児教育の急務	社会と教化	二一二三	大九・五	*	*
青年団の娯楽問題	社会と教化	二一二四	大九・五	*	*
法治国から教治国へ	社会と教化	二一二五	大九・五	*	*
家庭教育第一を提唱す	社会と教化	二一二六	大九・五	*	*
非實際的な学校教育	社会と教化	二一二七	大九・五	*	*

教育の実際化に就いて	社会と教化	三一〇三	大12・3	*
職業指導上より観たる教育の実際化	社会と教化	三一〇四	大12・4	*
青年団の新傾向	青年	八一五	大12・5	*
徳性涵養と社会教育	社会と教化	三一〇五	大12・5	*
我国に於ける民衆娯楽大観	社会と教化	三一〇六	大12・6	*
趣味の教育と娯楽の教養	社会と教化	三一〇六	大12・6	*
公民教育と作業	補習教育	七	大12・7	*
能率増進と教育の改造	社会と教化	三一〇七	大12・7	*
教育画報に序す	教育画報	一七一	大12・10	*
災害の復興は精神の作興より	青年	八一	大12・11	*
年頭所感	教育時論	一三八九	大13・1	*
年頭所感	社会教育	一一	大13・1	*
復興に対する一考察	社会教育	一一	大13・1	*
焦土の帝都に咲いた教育の花	社会教育	一一	大13・1	*
野外国少民学校	社会教育	一一	大13・1	*
貧困児童就学奨励資金御下賜について	社会教育	一一二	大13・4	*
義務教育の延長と社会教育	社会教育	一一二	大13・4	*
青年と政治	社会教育	一一三	大13・5	*
青年団訓練革新の要諦	青年	九一六	大13・6	*
家庭教育者としての婦人の使命	社会教育	一一四	大13・6	*
職業教育と学校教育	小学校	臨増	大13・8	*
椅子を離るるに臨んで	社会教育	一一五	大13・8	*
教育の更始一新	農業教育	二八四	大14・4	*
老年と青年	社会教育	二一四	大14・4	*
補習教育の振興に就いて	補習教育	三五	大15・1	*
振え社会教育	社会教育	三一	大15・1	*
小学教育に宗教教育を加うべし	教育時論	一四九六	昭2・1	*
斯る主義で行われる人物試験	中学世界	八一	昭3・1	*
音楽と教育	社会教育	五一六	昭3・6	*
社会教育の往時を回想して	社会教育	六一七	昭4・7	*

現代生活と音楽	教育研究	三五二	昭5・1	*
青年の教育と音楽	補習教育	八三	昭5・1	
巻頭辞(『遺文集』所収)	音楽(学友会)	一〇	昭5・3	
実業補習教育実行録に寄せられたる指導先輩者の激励寸鉄	補習教育	九五	昭6・1	
巻頭辞	音楽(学友会)	一二	昭6・3	
絵本唱歌の編纂について	幼児教育	三二二	昭7・2	*
此の場合の反省	児童教育	二六三	昭7・3	*
非常時の社会教育に就いて	青年教育	一一七	昭7・11	*
音楽教育に対する所感	教育研究	四二二	昭8・12	
躍進日本	音楽(学友会)	一五	昭10・3	
統後に於ける我等の覚悟	音楽(学友会)	一八	昭12・10	
青年学校に於ける音楽科新設と吾等の任務	青年教育	一五五	昭11・1	
情操教育としての幼児音楽について	保育	二七	昭14・1	

(注) 掲載雑誌名の記載のないものについては、各本文に付記された年・月を採用した。

(四) 田中耕太郎(たなか こうたろう)

在職期間 昭和二十年十月～二十一年一月。

法学者。明治二十三年十月二十五日、裁判官であった父の任地鹿児島で生まれる。大正四年東京帝国大学法学部卒。明治神宮造営局および内務省に勤務の後、大正六年東大助教、十二年教授、商法担当。昭和十二年～十四年法学部長。戦時中自由主義者として軍部の攻撃を受けた。

昭和二十年十月より文部省学校教育局長を兼任、また教職員適格審査委員として教職追放の実行に当たる。二十一年第一次吉田内閣文相となるが首相と対立して八カ月で辞任。同年貴族院勅選議員、二十二年参議院全国区当選、緑風会に属す。二十五年～三十五年最高裁長官、三十五年四十四年国際司法裁判所判事。三十五年文化勲章受章。昭和四十九年三